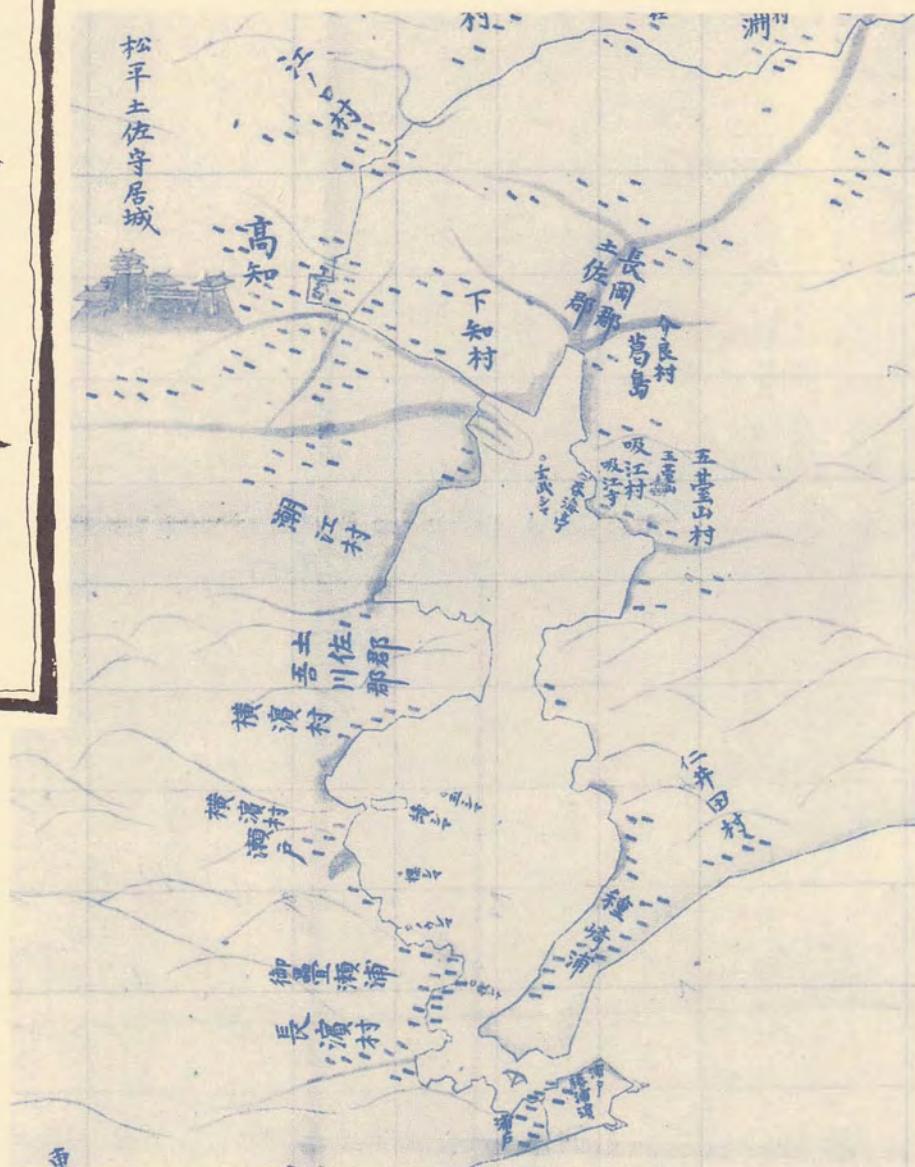


伊能忠敬研究

史料と伊能図

一九〇〇五年 第四一號



伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵

伊能大図一五九号部分「土佐・高知」

文化五年（一八〇八）から六年、はじめにかかつた第六次（四国・大和路）測量のコースにある。室戸岬を廻って土佐湾岸を東から進んできた。種崎浦に止宿、土佐湾奥からさらに深く湾入する浦戸

湾の入口、浦戸向から湾の東岸を北上、五臺山村から湾の最北部介良村に達し、ここから舟で堀川から城下に入る。

五臺山には四国第三一番札所、竹林寺があり、文殊菩薩をまつる。現在、五台山公園は高知市の夜景スポットだといつが、日記にも「風景好」とある。山の下、海上の呑海亭は国主遊覧の地という（日記）。

城下には七泊、この間、手分けした坂部貞兵衛、柴山傳左衛門らの一隊は北に向かい、土佐・伊豫国境の笹ヶ峯まで、四国横切測量の南半部を測つて戻る。忠敬は体調思わしくなく、下河辺政次郎、青木勝次郎らの一隊が城下から湾岸、湾奥から浦戸までの湾西岸を測る。

五月七日出発、浦戸から西行する。坂部らの別手は、城下経由で九日に本隊に合流した。「多聞に洩れず、今では浦戸湾内にも埋立て部分が多い。

（鈴木純子）

（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次 41号

伊能忠敬生誕二六〇年を祝う

特集1 伊能忠敬故郷を測る 佐原実測図復元

特集2 佐原市の多彩な記念行事から「絵画作文展」

特集3 忠敬の前半生 生活の地・佐原

佐原の町並図・三社詣図

特集4 忠敬翁のふるさと佐原を訪ねて

佐原知らずの新たなる感動

忠敬を詠む（三）

話題

「伊能忠敬大図展 in 武藏」を終えて

忠敬先生おおいに語る—前川家の接遇記録

忠敬を詠んだ短歌と俳句

測量隊足跡取材隨行記

忠敬の足跡を追つた日曜日

道・時空を超えて

八幡宮の伊能像—よみうり寸評

武揚堂社名社印の由来

島原街道を行く—伊能忠敬追っかけ記

研究ノート

伊能古文書教室『旗門金鏡類録』（八）

伊能家文書紹介（五）尾形謙二郎書簡

間宮林藏の東蝦夷地測量

続・忠敬未公開書簡（三）箱田園右衛門書簡

忠敬と林藏 師弟の絆が蝦夷地の地図完成（二）

忠敬談話室だより

佐原訪問記・大野弥三郎

お知らせ

編集部

佐久間達夫

表紙図解説 鈴木純子

写真 伊能洋、福田弘行

編集部 萩原哲夫

七〇

伊能忠敬生誕二百六十年を祝う

佐原の児童が大歓迎 伊能大図214枚がふるさとへ



佐原市民体育館にて
6・10

九十九里に偉人誕生！

一七四五（延享二年）乙丑（きのとうし）十二月閏

○二月五日、亀戸天満宮近隣の在家より火出で、元祖信祐が建立せし社頭以下、一字も残らず焼亡せり。○同十一日より、回向院にて、上州脇屋山正法寺観世音開帳。○二月十二日朝五時過ぎ、千駄谷より出火、青山残らず、桜田、麻布、三軒家、本村氷川社善福寺門前、広尾白金村、三田伊皿子、白金瑞聖寺、猿町、車町、高輪、南北品川迄、焼失。翌十三日、鎮まる。……○八月十九日、大風雨。芝海辺、竜巻あり。○九月十四日、大風、家屋を損す（浅草福井町銀杏八幡の銀杏古樹、吹き折れる）。
齊藤月岑著 武江年表 平凡社・東洋文庫

○九月、徳川吉宗が引退し家重に譲る。三十年にわたった吉宗の治世が終る。○前年二月五日夜、江戸の空、中天よりやや西に珍しい星座が現れた。正方形の四点とその中心にあたるところに一点の組み合わせ。町民は「嘉瑞」と喜んだ。

読める年表日本史 自由国民社



伊能忠敬 故郷を測る 佐原実測図復元

江戸遊学前の腕試し？入学前の作品？

伊能忠敬が当時の佐原村の利根川を測量した実測図が復元され、6月11日12日に佐原市市民体育館で公開された。この実測図は伊能家にあったもので、その存在は一部の研究者の間では知られていたというが、一般に公開されるのは初めて。

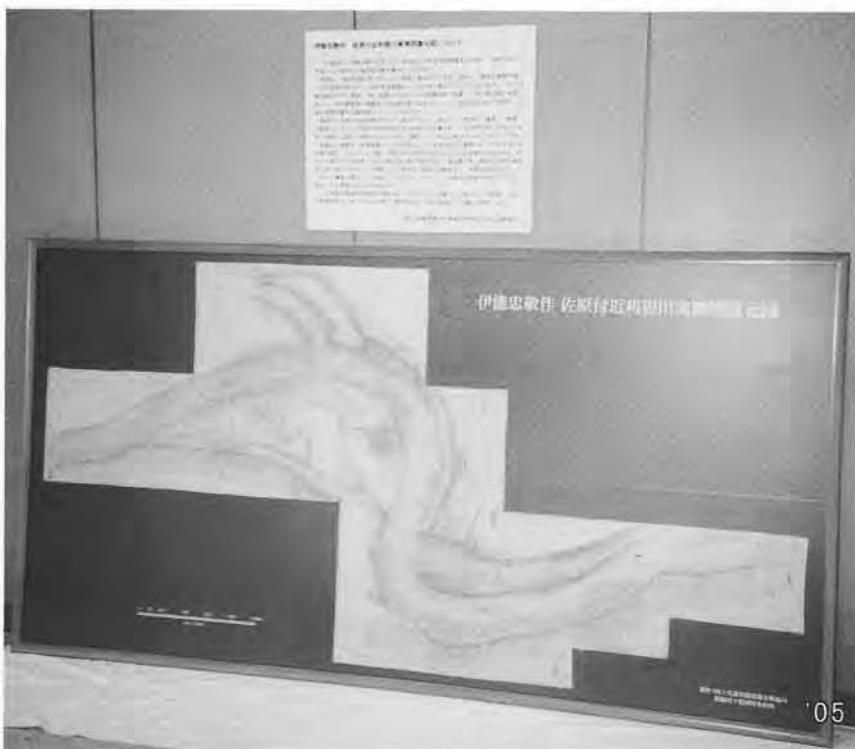
復元図は縦130cm、横260cm、縮尺は1/200分の1。現在とは違った蛇行していた佐原市周辺のその支流が正確に図面化されており、「佐原」「篠原」「飯島」「粉名口」など現存する地名も記されている。伊能家で保管されていた原図はA3ほどの大きさの和紙16枚に描かれていた。今回日本地図センターで原図をつなぎ合せ、デジタル処理でパネルにしたもの。国土交通省利根川下流河川事務所が製作した。図中の注記に「寛政六寅春引堤」（一七九四年）と書かれており、忠敬が一七九五年に佐原を出て幕府天文方に弟子入りする前に作成したものと考えられている。利根川と共に育った忠敬の夢が込められているようだ。

日経新聞6月9日のコラムでは次のように紹介している。

『伊能忠敬研究会、渡辺一郎名誉代表は「独学の技術を身近な場所で試したのだろう。江戸に出る前から曆学や天文以外に、測量に关心があつたことをうかがわせる」と指摘している』

なお、ふるさと佐原市は、来春から市町村合併により「香取市」になるそうである。

伊能忠敬作 佐原付近利根川実測図復元図



生誕260年特集2

佐原市の多彩な記念行事から

佐原小学校の忠敬祭



地図のまち・佐原2005「絵画作文展」



国土地理院長賞
神南小学校
篠塚ひかりさん
(佐原青年会議所
広報誌いなほから)



忠敬祭 二年生 第一校舎プレイルーム 6・10



香取の神に 守られて
忠敬翁が したいた道
そうだ 教えの 花かおる
道を はてなく 伸ばすのだ
佐原小学校校歌

郷土の偉人「伊能忠敬」の幼少の頃から地図作成に至るまでの生い立ちを勉強し、困難を乗り越えて一つの仕事をやり遂げた業績とその努力を学んだ。

忠敬先生について
紙芝居とクイズ



六年生は観福寺を訪ね、「忠敬さん」のお墓に花とお線香をたむける。住職さんの講話を聞いて、忠敬の日本地図作成に至るまでの生涯の足跡を知る。郷土の偉人の業績に触れることを通して、自らの生き方を考えるきっかけとして忠敬祭が行われている。

シンポジウム「世界の忠敬 佐原の忠敬」
～「伊能忠敬」をどう生かすか～
佐原市中央公民館に大勢の市民や忠敬ファンが集合する。基調講演から始まる。東京大学史料編纂所教授の横山伊徳氏は「世界史上の伊

6・11



能図」を。次に千葉県立佐原高校教諭・酒井右二氏は「伊能忠敬を生む基盤」を語る。忠敬の房総における軌跡、利根川流域の経済力、町場の自治的に気風、文化的土壤の形成など詳細に忠敬のバックグラウンドの特徴を論評される。地元の忠敬研究第一人者の面目十分に。

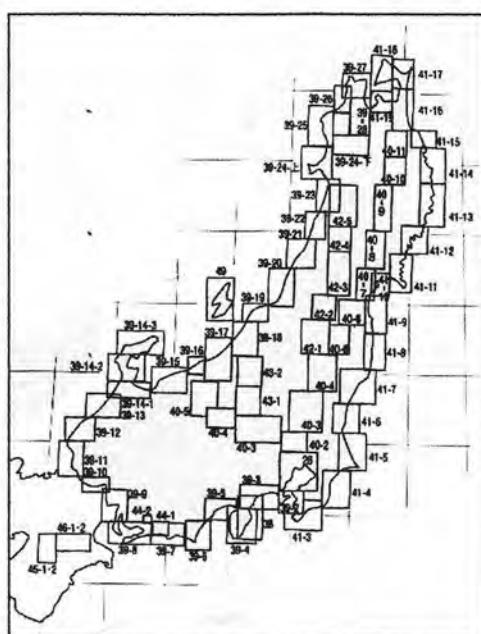
続いてパネルディスカッションに。コーディネーターは当研究会の星埜由尚代表理事が務める。パネリストは多彩なメンバーが揃っている。基調講演の横山伊徳さんと酒井右二さんとに伊能家の伊能陽子さん、NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会副理事長吉田昌司さん、佐原市立第五中学校長高橋賢一さん、佐原青年会議所理事長杉山慎一さん。「世界の忠敬 佐原の忠敬」をどう生かしていくのか。それぞれに豊かな明日に向かっての思いを熱心に語り続け、予定時間を越えていた。

を認めさせた記念すべき地図でもあります。記念館には全国の伊能図はありませんが、忠敬と佐原周辺の人々の努力の結晶であるこれらの地図は、佐原にとつて貴重な資料です。



大図が床に広がる

大活躍は青年会議所のみなさん



忠敬江戸入りフォーデー ウォーク
「佐原から江戸へ」
110キロ
6・9

佐原中央公民館から成田山新勝寺へ向う一行。
10日は我孫子手賀沼公園まで。11日は市川関

所跡。最終日12日には富岡八幡宮の伊能忠敬銅像前にゴールした。またこの日は銅像前で
「伊能忠敬銅像ウォーク」が開催された。

(資料提供、協力)成家淑子さん



佐原青年会議所、佐原小ほか佐原のみなさん

忠敬の前半生 生活の地・佐原

佐久間 達夫

一、江戸時代の佐原村

佐原村は、利根川の下流域に位置し、北は利根川を隔てて霞ヶ浦や北浦の湖沼を囲んでの水田地帯、西から南の後背地は、下総台地といわれている畑作地帯、それに下総台地に隣接して、魚介類の豊富な十九里の海が広がっている。

そのうえ、江戸幕府の利根川東遷事業によつて、承応三年（一六五四）に、利根川の本流が佐原を通つて銚子で太平洋に流出するようになつた。これによつて、東北地方や利根川の下流域の船は、危険な房総沖を避けて、銚子から利根川に入り、佐原、木下、関宿に至り、江戸川を下つて江戸へ行くルートをとつた。そのため佐原は、水運の中継地となつて河岸が発達し、川船の往来が繁くなつた。

村の中央を南から北へ蛇行して流れる佐原川（現小野川）と、それを横切つてある香取街道の両側には、「船だまり」や「だし」と呼ばれる荷物の積みおろし用の船着き場、それに倉庫、土蔵が立ち並んでいた。これらの施設のなかには現在も残つてゐるものがあり、当時の佐原河岸の繁栄を偲ばせる。元文五年（一七四〇）の「佐原村鑑明細帳」（伊能忠敬記念館蔵）によると、

佐原村 高瀬船二三艘、ひらた船一七艘、茶船一六艘、
耕作用船（小房丁舟）一一〇艘

と、記述されている。

また、利根川の舟運は、物資の輸送だけでなく、香取、鹿島、息栖の三社詣でをする人も多くなり、それに伴つて江戸との文化の交流も盛んになつて、小林一茶、十辺舎一九、渡辺華山などの文人墨客が来訪し、地元からも歌人・国学者楫取魚彦、伊能穎則、漢学者清宮秀堅、儒者久保木清淵などが輩出した。

二、伊能家旧宅 佐原市本橋元一九〇〇番地

昭和五年四月二十五日 国より史跡に指定

店舗と母屋（母屋は寛政五年に忠敬が設計）

家族

・義父 伊能家九代長由（六代景利の三男）

・義母 夕ミ 多古町南中平山藤右衛門秀曉の娘

墓地 佐原市寺宿淨国寺

・妻 ミチ

宝暦十二年十二月八日結婚

寛保二年（一七四二）長由没（三七歳、夕ミ二〇歳）

三、伊能忠敬記念館

・分館

所在地 佐原市佐原イ一九〇〇番地

伊能忠敬旧宅内

構造 鉄筋コンクリート造二階建

事業費総額 一六、八三一千円

竣工 昭和三十六年四月三日

・本館

所在地 佐原市佐原イ一七二二一一番地

伊能茂左衛門家敷地跡

制作者 大熊 氏広

竣工 平成十年五月二一日

構造 鉄筋コンクリート平屋建（一部二階）

事業費総額 一、三九九、六〇二千円

指定 国指定重要文化財 昭和三二年二月十九日

史料 伊能忠敬・忠誨の遺書遺品 二一五種 九六一点

佐原小学校

昭和四十三年三月、新校舎竣工記念事業の一つとして銅像制作

制作者 西 俊夫

伊能忠敬旧宅の敷地

平成十一年二月十一日、西俊夫氏の遺言を受けて、妻君枝氏が、

伊能忠敬のブロンズ像を寄贈

四、伊能家の菩提寺

・観福寺 佐原市牧野一七五二番地

寺伝 寛平二年（八九〇）尊海和尚がお堂を建立

・伊能家の墓地（忠敬関係）

忠敬 法名 有功院成裕種徳居士

妻達 研心院妙唱日鏡大姉

長男景敬 秦鏡院裔誠道研居士

妻リテ 鏡知院咬月亮貞大姉

忠敬後妻信 淨蓮院成実妙貞大姉

長女稻 横巣院躰常妙実大姉（華香院妙薰日明）

二女篠 種鏡院霜空妙融大姉

三男順治 智玉院放光贊照童子

六、佐原村絵図

・佐原村新宿範絵図（伊能家所蔵）

市場

市神様

上宿の上新町入り口の道路の真中

柏木久兵衛の屋敷

佐原市給食センターの所

・佐原村田地範絵図（小倉陽一氏所蔵）

船入り場

大木戸

高札場

舟戸稻荷社脇

浜宿の香取肇宅

下仲町鈴木理髪店脇

五、伊能忠敬の銅像

・佐原市諏訪公園

大正八年三月二日佐原町が建設

碑 文 仰瞻斗象、俯画山川

仰いて斗象をみ、ふして山川を画く

七、伊能忠敬を支えた人々

・久保木清淵

清淵は、幼名を新四郎といい、家督相続後、太郎右衛門と称した。字は初め蟠龍（ばんりゆう）、後に仲默と改め、号は竹窓、竹陰などといった。佐原市津宮に生まれ、少年時代、香取根本寺の僧松永北溟に学び、

撰並びに書

塩谷 時敏

経学、書道に通じていた。忠敬の全国測量の地図作製に献身的に協力した。又、忠敬の肖像画の上部に記されている「贊」を書いたり、測量隊が携帯した「御用旗」も製作している。

忠敬が序文を寄せた「補訂鄭註孝經」や「香取私記」などの著書がある。文政十二年八月二十八日没。法名は「思恕院至徳清淵居士」という。

大川治兵衛

大川治兵衛は加納屋治兵衛ともい、諱は成定という。津宮村下宿（現佐原市津宮）の人で、江戸で両替商を営み財をなす。

伊能忠景父子に帳元締として仕え、五九歳で没す。法名は「光月院施心覺道信士」といい、墓地は、佐原市津宮小学校の隣接地にある。大川家の子孫は絶え、三百坪の屋敷跡には、現在三世帯が住んでいる。

柏木久兵衛

柏木久兵衛は、伊能三郎右衛門家の三世代（十代忠敬、十一代景敬、十二代忠誨）に仕えて、伊能家の家業や他家との交際に裏方として尽力する。また、忠敬の内妻妙諦の父・乙右衛門幸七を養子にする。墓地は、伊能家と同じ佐原市牧野の観福寺にある。子孫は佐原市仁井宿に住んでいる。

測量に参加したが、行ないが悪いとの理由で文化十二年末に父忠敬に勘当されてしまった。

平山宗平

忠敬の妻の母親の生家の多古町南中の平山季孝の二男。

吉助 佐原の人であるが、出生宅は不明。

2 第二次測量

平山郡藏

平山宗平の兄。第五次測量先で不穏な行為があつたとの理由で破門される。

尾形慶助

佐原市香取の神官尾形平馬の子。十六歳の時に忠敬の内弟子になり、久保木清淵に漢学を、会田安明に数学を学んだ。第二次、三次、四次、五次、八次、十次の測量に従う。「伊能東河先生流量地伝習録」の著者。

伊能秀藏 平山宗平

3 第三次測量

伊能秀藏 平山郡藏 尾形慶助 久兵衛（柏木久兵衛）

4 第四次測量

伊能秀藏 平山郡藏 尾形慶助 久兵衛

5 第五次測量

伊能吉兵衛 佐原の人であるが、出生宅は不明。

山武郡松尾町借毛の秋葉五郎太夫常房の二男。佐原の永沢治郎右衛門征俊の娘と結婚。測量に参加したが宮津城下で病氣になり帰府する。

伊能秀藏 平山郡藏 尾形慶助

八、全国測量参加の佐原人たち

1 第一次測量

・伊能秀藏

忠敬の二男で、第一次測量から第六次の測量まで、忠敬に従い

第六次測量

久保木佐右衛門

佐原市津宮の人。第六次と八次測量に長持宰領として参加する。菩提寺は香取の新福寺で、同寺の過去帳に記されている「長安朴道禪定門・天保三年三月二十日没、津宮村下宿佐右衛門」が、佐右衛門と推測される。屋敷跡は不明であるが過去帳に「津宮村下宿、佐右衛門」と記述されているので、大川治兵衛家と同じ町内（下宿）に住んでいたことがわかる。

久保木佐次右衛門（佐助）

佐原市津宮字下宿七八九番地の久保木泰正の祖。第六次と第八次測量に棹取として参加する。墓地は津宮の平野魚店の裏手。菩提寺は、香取の新福寺。同寺の過去帳に記されている「空外

道劫信士が、佐次右衛門（佐助）と推測される。

神保正作

忠敬の兄・神保貞詮の子

伊能秀藏

第七次測量

黒田藤吉（佐原村の人か）

第八次測量

宮野善蔵

大栄町伊能三四四番地、三谷公平氏の祖。江戸へ出て寺田氏の養子になる。第八次測量に参加したが、京都で病気になり帰府する。三谷家に「忠誠院護國測岡居士」という位牌がある。

- ・尾形慶助 久保木佐右衛門 久保木佐次右衛門
- ・大山甚助（佐原村の人か）

九、東国三社

香取神宮

佐原市香取に鎮座。祭神は経津主命（ふつぬしのみこと）。旧官幣大社。本殿は、元禄一三年（一七〇〇）五代將軍徳川綱吉が造営したもの。社宝に日本三名鏡のひとつ海獸葡萄鏡（国宝）のほか、多くの指定文化財がある。

○鹿島神宮

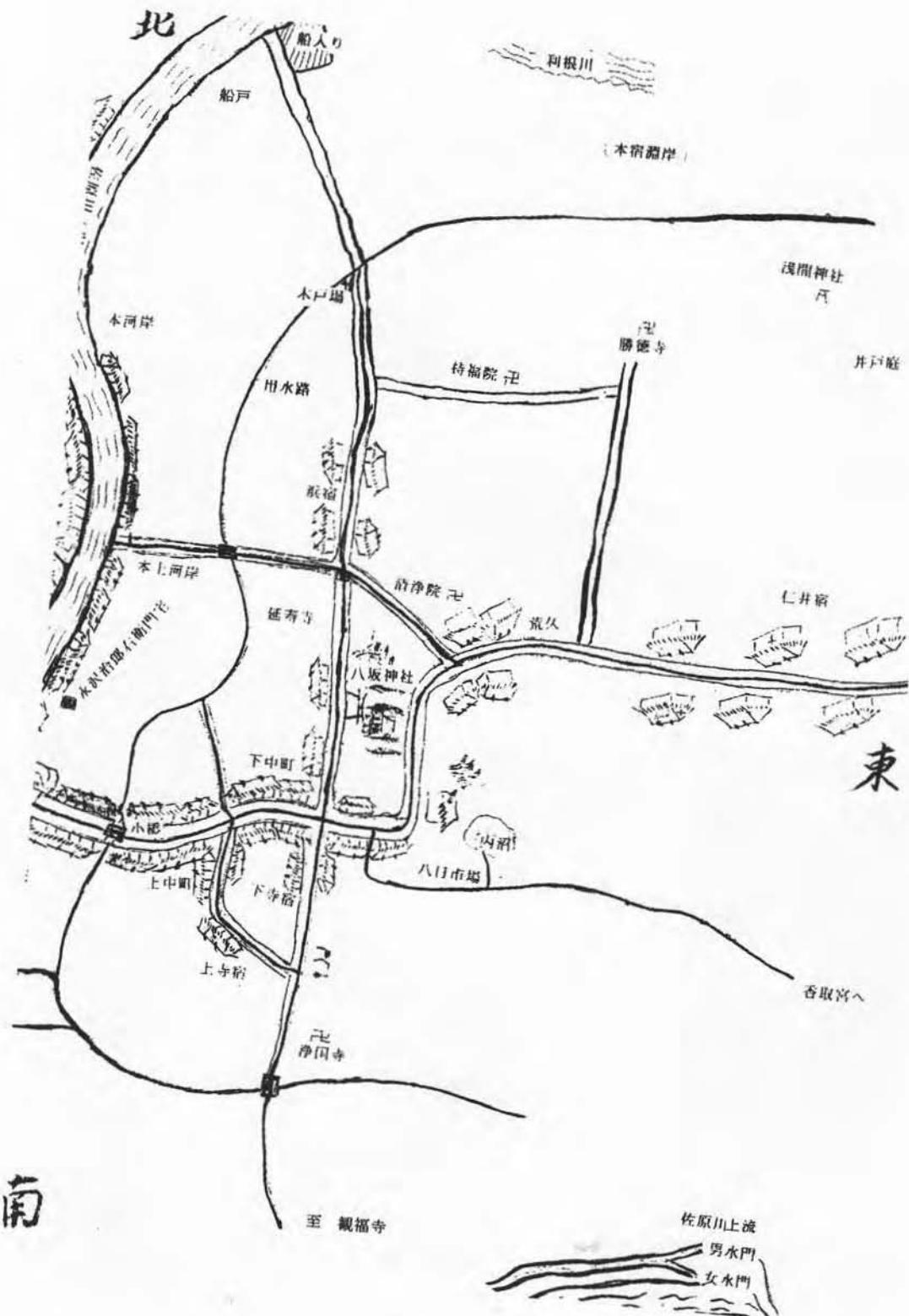
茨城県鹿嶋市に鎮座。祭神は武甕槌命（たけみかづちのみこと）。楼門は、寛永二年（一六三四）初代水戸藩主徳川頼房の寄進により建立、社殿は、元和五年二代徳川秀忠が奉納、いずれも国的重要文化財に指定されている。

○息栖神社

茨城県神栖町にあり、祭神は海の守護神である住吉の神「底筒男（そこつま）、中筒男（なかつま）、表筒男（うわつま）」の命。『総常日記』には、「水際から三十間ほど離れて海中に鳥居が立っている」と記されている。江戸時代には、香取、鹿島、息栖の三社詣での人で賑わい、現在は、鹿島工業地帯の一角をなしている。

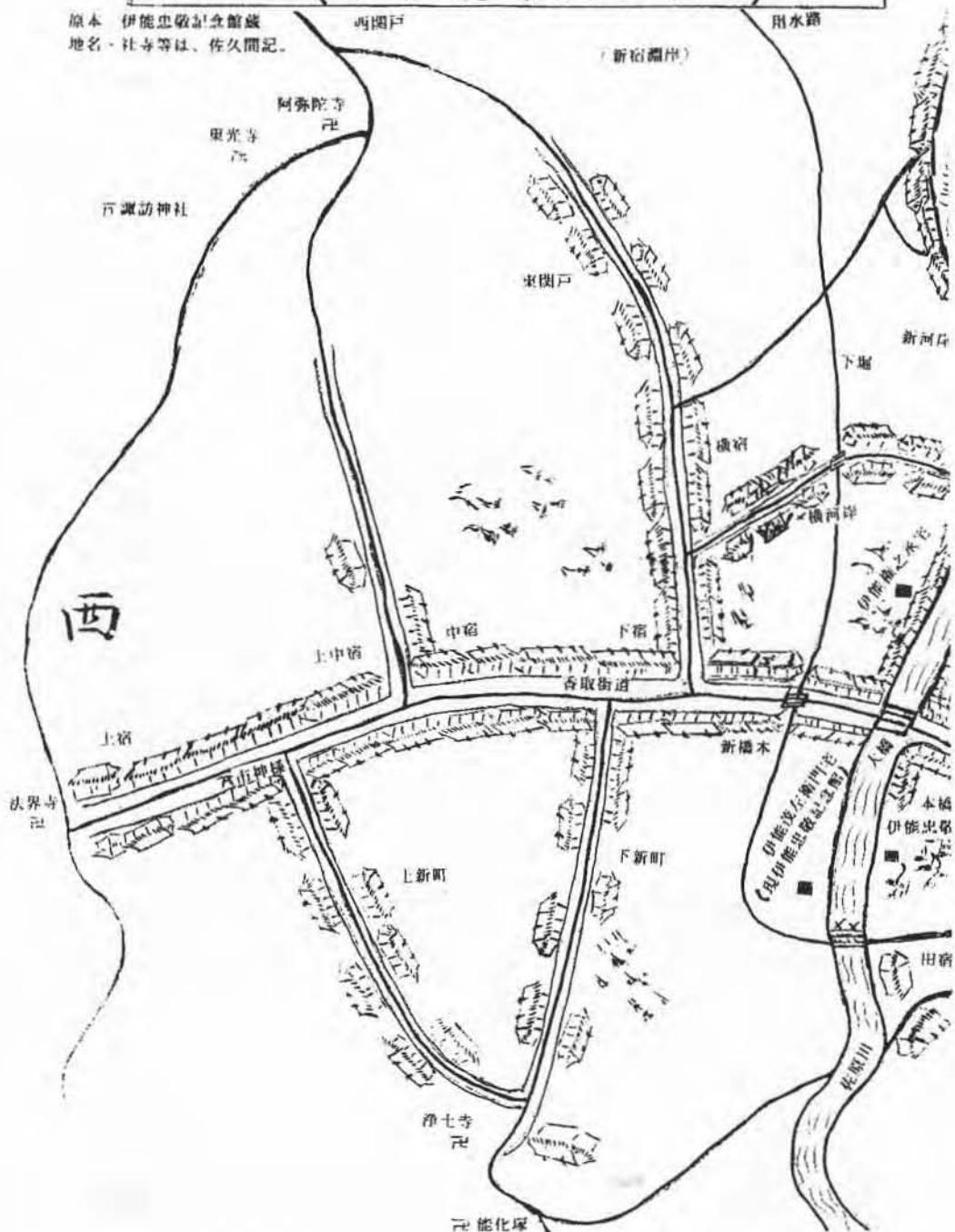
（さくま たつお・佐原市）



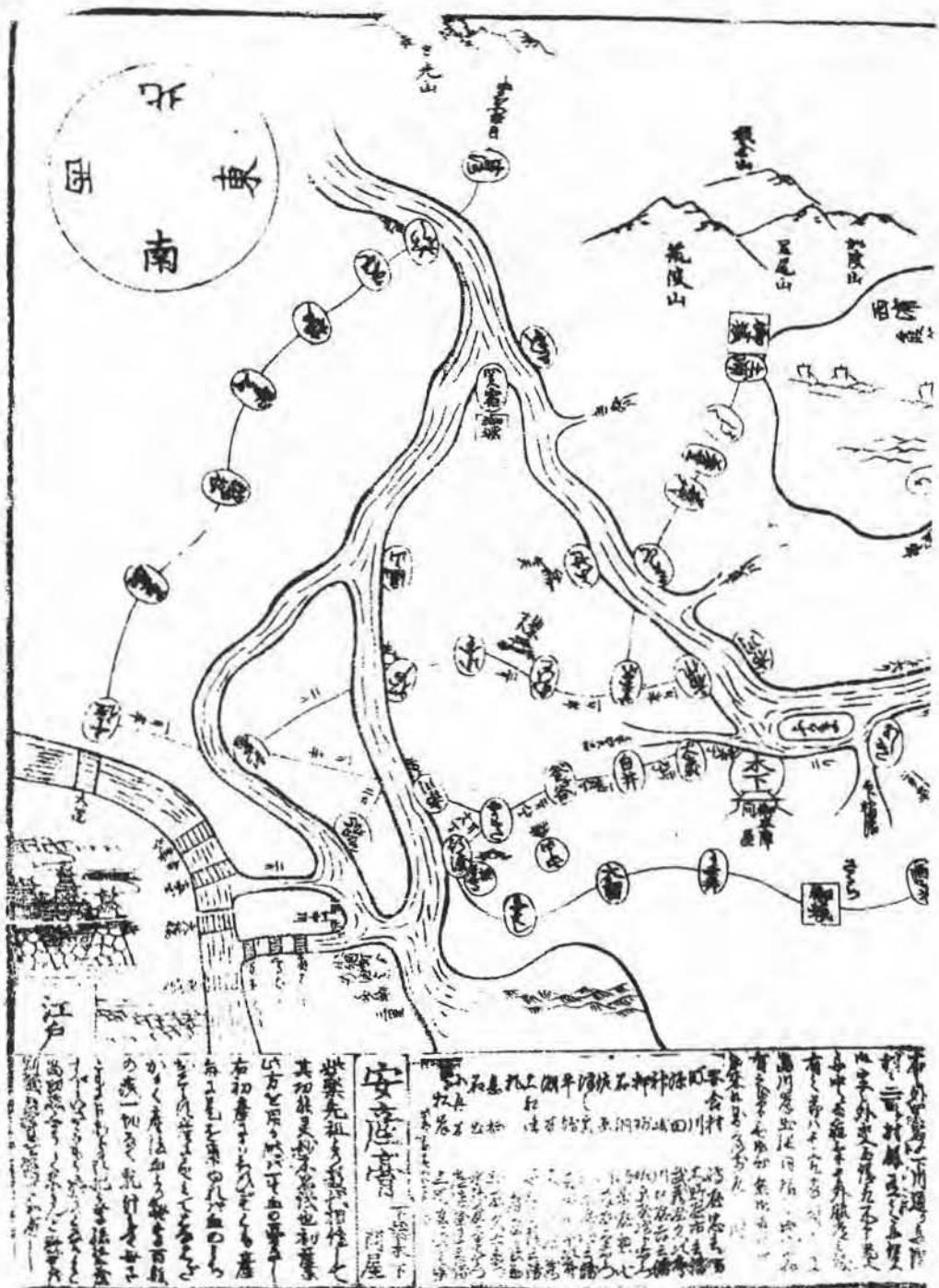


江戸時代の佐原の道路及び町並図
(用水・悪水路を含む)

原本 伊能忠敬記念館蔵
地名・社寺等は、佐久間記。









小野川沿いに旧宅、宮定が並ぶ

平成十七年六月十一、十二日、生誕二六〇周年として佐原市が記念イベントを行うにあたり、研究会の研修を兼ねた旅行は佐原を訪れることになった。

六月十一日（一日目）佐原市内にある伊能忠敬と関連のある史跡を巡る。

新沢義博

忠敬翁のふるさと佐原を訪ねて

正午に旧宅隣りの割烹宮定に集合する。宮定では映画やテレビのロケで小野川を撮影する際に、出演者が休憩場所として使うらしく、多くの芸能人の記念写真が掲げられている。



当時の町並み再現図について佐久間さんの解説

外に出て旧宅の裏へ。旧宅は昭和五年四月二十五日に国より史跡に指定される。母屋は寛政五年に忠敬が設計。旧宅内にある二階建てのものは記念館の分館。旧記念館ではあるが現在も史料を保存している。

裏庭には市内に三つある銅像の一つが建立されている。他の二つは諏訪公園と佐原小学校にある。佐原小学校にある銅像の制作者は、西俊夫氏の遺言を受けて、妻の君枝氏が平成十二年二月二十一日にブロンズ像を寄贈したのが裏庭にある銅像のこと。また庭の中に水路の跡が一部残っている。敷地内に水路があるというのはよほどの財力を所有していたという証しであると佐久間先生の解説。

平成十年五月二十一日に竣工された新記念館へ。エントランスホールに、私としては懐かしい掛軸が三幅。「伊能ウォーク」期間中、その日その日にゴールした自治体の首長さんが署名された伊能中図の掛軸。市町村合併や首長選挙で地名や人名が現在、適用されいない箇所がある。こちらも立派な史料として展示されている。ちなみに私が二年間この署名図を管理・運搬させていただいた。

記念館見学後、バスへ。佐原市のほうで二日間、大型バスを提供してくださる。ここでちょっととしたハプニング発生。土曜日という

ことでもあつて古い町並みの道は大渋滞。会員を待つていたが後続車の通行を妨げるため、やむを得ず一度その場を離れて市街を一周することになった。時間のロスにはなつたが思わぬオプションが付いた。先に述べたが大正八年三月二日、諏訪公園に建設された銅像を車窓から拝見することができた。制作者は大熊氏広。他に大村益次郎や伊藤博文などの銅像を製作している。乗り遅れた方には申し訳ないが「急がば回れ」とはまさにこのことではないかと心の中で苦笑する。

全員、無事乗車後、伊能家菩提寺である真言宗豊山派觀福寺へ。同寺は八九〇年に尊海和尚がお堂を建立。こちらのお墓には忠敬の遺髪と爪が葬られている。遺骨は上野・源空寺に埋葬されている。

次は小島先生の浄国寺へ。現在は息子さんに住職をお譲りになられ隠居の身と小島先生。先生が興味深いお話しをしてくださる。伊能家の奥方は日蓮宗を信仰されていたため、真言宗である觀福寺にある忠敬の妻・達さんの戒名に日蓮宗に命名する「日」の文字が含まれているとのこと。真言宗のお墓に他宗の意味する戒名をつけるのは非常にまれだということをご説明してくださる。



浄国寺では小島院主から直々に達さんの話を伺う



待望久しく大図214枚が佐原で公開された

その後、大図フロア展を見学しに佐原駅からすぐ北にある市民体育館へ。私としては昨年の釧路、日大文理学部、今年に入つて幕張と四回目の見学になるが、見飽きることなく四回目の日本一周を伊能大図で行うことができた。今回、目を引いたのは地元の小学生から高校生までが描いた忠敬の絵。どれも上手に描かれていた。作文もあり子どもの時から郷土の偉人を尊敬しているのがよく表われていた。偉人を尊敬しているのがよく表われていて、全國測量の地図作製に

香取神宮参拝後、研究会佐原支部長の香取禱良さんの自宅を拝見しながら一日最後の見学地、久保木清淵の墓へ。

常総台地上にあるお墓までは多少登つて

いかなければならぬ。佐久間先生いわく、

当時頻繁にあつた利根川の洪水で、平地にあ

るお墓は流されてしまうという。あえて水を

避けるため山の上にお墓があるという。久保

木清淵は忠敬を支え、佐原で一番に忠敬と親

しい間柄だった人物。全國測量の地図作製に

らない土地であることが理解できる。

宴会後、岩瀬市長・秋山教育長・伊能館長がお見えになり、お酒の差し入れをしてくださる。渡辺一郎名誉代表はNHKの大河ドラマで伊能忠敬を実現させるために力を注いでいることを熱心に語られた。



久保木竹窓墓所



二日目は午前八時半に鯉屋旅館を出立。

潮来市在住の窪谷さんのご案内で息栖神社・鹿島神宮を参拝する。

昨日の香取神宮を含め、東国三社を二日にわたつてお参りすることができた。

昼食地である塙本そば店近くの郷土資料館では全国的に著名な潮来の花嫁さんの衣装等を見学する。本物の嫁入舟に乗り記念写真を撮ることができた。

いう先生は津宮からご自宅まで歩いてお帰りになるという。一日目、先生のご案内のおかげで忠敬と佐原のことがより一層理解することができた。また、この報告書を作成するにあたり数多くの文面を引用させていただいた。

一路、小見川町を通り東庄町にある今晩のお宿、鯉屋旅館へ。部屋からの眺めはよく、最初目の前を流れる川を利根川と勘違いしたのは小生だけではないであろう。その川は支流の黒部川のこと。釣り好きの人にはたま

そのあと、一八五年に源頼朝が開基した臨済宗妙心寺派の長勝寺をお参りする。禅寺らしいたたずまいの中、ふと京都にいるような錯覚におちいるほど風情あるお寺で、潮来にこれほどの由緒ある古刹が存在するとは知らなかつた。窪谷さんが谷玄明住職にお願いして特別に本堂の中に入いらせてもらうことができた。十五分間ではあったが住職から潮来は水戸藩の飛地だつたことから同寺は水戸光圀と縁が深い寺だつたことや、貴重な仏の



左、長勝寺にて・藤岡家墓所

上、花嫁花嫁ご一同

悟りを拝聴することができた。

昼食後、窪谷さんとお別れしアヤメが咲き乱れる佐原市立水生植物園へ。四〇〇種一五〇万本の東洋一の見事なアヤメで埋め尽くされている。あらためて佐原は水郷の町であることを実感することができた。

バスはJR潮来駅で鉄道利用の方を降ろし、高速バスの停留所へ。停留所で今回お世話になつた佐原支部の香取禧良さん・本郷さん・成家さんに深々とお礼をお別れする。

正直申し上げて私にとっては伊能ウオーグ終了直後、ゴール報告に行って以来の佐原訪問であった。元をたどれば大学生の時、卒論でお世話になつたりして、初めて佐原を訪ねてから十五年ちかく時が経つてゐる。古い町並みは当時と変わりなく残つてゐる。今や都心からは高速バスを使えば一時間足らずで行くことができる。

今回、地元の方のご協力のおかげでゆかりの地、佐原を十分に再発見することができた旅行会であつた。

（しんさわ よしひろ・

元伊能ウオーク本部隊
朝日新聞開発、学芸員)

生誕記念行事参加者

50 音順・敬称略

安藤 由紀子 八千代市
いかるが 由紀子 八千代市
鶴 博敏 鴻巣市
新入会員

本郷 靖枝 佐原市
宮内 敏 銚子市
天能 彰 新入会員

先般
山口
惣司
山本
公之
一郎
渡辺
千葉県東庄町
新入会員
小平市
多摩市
名譽代表

新入会員
名譽代表

特別協力

佐久間達夫
小島 一仁

懇親會來賓

岩瀬佐原市長
秋山教育長
伊能記念館館長

今回の佐原探訪につきましては、香取禱良佐原支
部長はじめ、香取秀紀さん、成家淑子さん、本郷
靖枝さんほか佐原のみなさまにたいへんお世話に
なりました。天候にも恵まれ、お陰さまで有意義
な二日間でした。厚く御礼申し上げます。事務局

佐原支部長

佐原知らずの新たなる感動 一断片

山本公之

矢張り地元に来ると空氣を吸うだけで緊張する。雨の心配もなく、忠敬先生が歩いていた同じ地面を同好の諸兄妹と懐古逍遙する。

やめを両岸に見ながら、高瀬舟から揚がつて自宅に戻る忠敬先生が眼に浮かぶ幻影。私のインスピレーションが悩みの種ですが……。恥ずかしい話ですが、飯田橋のマンション六階は研究会の前の事務所。手伝いを始めて間もなく一人で留守番していた時、「折角東京まで出てきた年寄が、帰るまでに是非とも佐原の記念館に行つてみたいと言うのです。そちらに聞けば、教えていただけると申して居りますのですが……」と、会員の奥様か、身寄りのお方と覺しき温もりのある電話でした。この即答しなければならない事情にすっかり私は混乱して、記念館の電話番号をお教えるのが精一杯でした。まだ一度も行つていませんのでとは、正直言つて外聞が悪いし、そんなこんなで、「佐原初体験」というわけでした。

足元を気遣つての急な狭い小道を登り詰める。参加した研修会員の熱意が頂上に溢れた。それまで回ってきた所は、一般の人にも馴染みでしようが、ここまで足を延ばすことは少ないか、恐らくあるまい。

伊能忠敬その他この地域の方々の伝達しきを得なかつたら正直のところ「伊能図」はできなかつたでしよう。久保木太郎右衛門清淵の墓地が今回の研修旅行のクライマックスではなかつたろうか。参加

者に配布された郷土愛が偲ばれる佐原市津ノ宮地区図は語つていまし

たし、もう一度来られるかどうか、忘れられない極点になつた。

かけ離れて恐縮ですが、1997年の東京大学建学明治10年と題した「創立120周年記念東京大学展」学問・現在・未来の図版のトヅバツターは、伊能忠敬の遺品「鸞寧羅鍼」です。曰く、これは伊能忠敬（1745～1818）

が、方位角の測定に用いた方位盤の一つ。目盛り

はクリノメーターと同じく逆目にふられいる。伊

能忠敬から地図作成の協力者久保木太郎右衛門に贈られた。「文政元年（1818）年以前／久保木

太郎右衛門旧蔵／総合研究博物館地理部門」と紹介されている。しかし、今度の佐原支部の皆さんとの出会いがあつたればこそ、地元の行き届いた体験研修がいかに貴重であるかと言える。

今後とも幾久く、ご指導を仰ぎたいものと存じます。

鹿島神宮では久しぶりに鹿を見たりしましたが、当日の恒例の武術の公開で、その昔懐かしい塚原ト伝を全く知らない若い会員さんが居ことを識り、若しかして時代が移り伊能忠敬を識る人が無くなつたら我々研究会の責任だけでは済まされなくなるのではないでしようか。

（やまときみゆき・小平市算数を楽しむ会）





後列左から 山本、伊能洋、香取秀、矢能、大沼、原田、江口、今村
本郷、星埜、伊藤、鈴木皓、伊能陽、久保木、井上、鶴、安藤、新沢
前列左から 香取穂、渡辺、中川、鈴木純、丹羽、成家、荻原のみなさん

2005年6月12日、
佐原市立水生植物園
あやめまつり会場



『伊能忠敬大図展 in 武藏』を終えて

（報告とお礼）

大坪秀二

◆ 私たちの願い

アメリカにあつた伊能大図の国内展示が企画されていると報じられたとき、私たちの学園もその会場のひとつに加えて頂けないだろうかと、無謀ともいわれそうな願望を抱いたのはわけがあった。

忠敬から数えて直系の七代目に当たる伊能敬^{たかし}、洋^{ひろし}の二兄弟が二人とも武藏学園の卒業生だというだけでなく、敬氏は95年に他界されるまで四〇年余にわたり学園の専任教師であり、化学史への造詣も深く、また、大学図書館長、人文学部長などを歴任されたり、洋氏は73年から三〇年近く武藏中学高校で美術を担当、発想豊かな授業で生徒を启发された。敬氏はフランスのペイレ氏藏中図が佐原で公開されるのを見ることなしに、その年の春に亡くなられたので、私たちは敬氏の思い出のためにも、大図展に武藏へ来て欲しかった。

一方、伊能洋、陽子^{ひろし}夫妻については、大図の彩色のこと、伊能家文書その他の解説のことなどでこの一〇年ほどの活躍を目のあたりにしていたから、私たちとしてはお二人を頼みの綱とも考えたわけであつた。

このような、伊能家と武藏学園との深い縁に連なつて、『大図展 in 武藏』が主催者側のご理解をいただけたのであろうと思つていて

◆ 展示の実際

実際の仕事は、他の諸会場と同様な大図プロア展示および一連の解説的展示と、武藏学園が独自に行う展示とに大別された。

一方の方々のご苦労によるものである。私たちは既に他の会場の展示を見てはいたものの、事前の作業を目の前で見ることが出来たのには新鮮な喜びがあつた。忠敬最後の仕事となつた江戸府内図や、本学園周辺百年間の変遷を語る20万図四枚も追加して頂いた。

後者、武藏学園側の展示はすべて伊能家から借用の資料を用いて、大学学芸員課程の学生たちが実習授業の一環として、教授の指導の下に計画し作業したものである。忠敬自身が模写した美しい彩色の世界地図、伊能家で現在も解説が進められている文書や地図下絵、それと浅草源空寺にある忠敬墓墓碑銘の拓本（伊能家から借用のもののコピーリ）を使っての墓の実物大模型、これら三種類で構成された。

本学園の学生生徒はごく身近に、とくに中学・高校生は授業の一環として、見学できるという幸せを得たが、一般の人々がどのくらい来てくれるのか、それが最後まで不安であった。それでも七日間に五千人近い来観者があつて、小さな展示会場としてはまずまずの成果だった。それよりも、土曜日午後の講演会が予定の会場（500席）では足りず、予備の小講堂まで使って行うことになつたのは来観者の関心の深さを示していたと思う。

◆ 会場での感想

22×18畳のこぢんまりとした会場に、関東から近畿まで73枚

の大図を並べた。日本地図センターの方々や、多摩自然科学研究所の有志の方々、また、伊能家文書関係では解説を担当された伊能忠敬研究会の方々が、毎日熱心に説明にあたつて下さった。地図の上に坐つて、手をついて細かい字を読む人々が目立つた。自分の郷里のあたりを熱心に眺めて、親から聞いた覚えのある近隣の地名を発見して嬉しがる人も多かつた。富士五湖が何故二つしか書かれていないのかとか、浅間山の形が本物と随分違うとかい、線の測量で成り立つて伊能図の限定された性格に関わる質問も多く寄せられた。詳細に観察して実測の導線が赤で記入されていること、宿泊地や天測のマークまで入つていていることなど、新発見に喜ぶ熱心な観察者も少なくなかつた。いずれにしても、一人一人がこれほど長時間会場に止まる展覧会は珍しいのではないだろうか。また、学園の展示でも、文書等の数を抑えた（13枚）おかげか、すべてを読んでゆく人が多数に上つた。これも素晴らしいことだつた。

神田明神から学園までのウォーキングを行つて下さった日本ウォークイング協会のご厚意もあつたし、講演会に対する練馬区教育委員会からのご支援もあつた。なによりも、「アメリカ伊能大図展実行委員会」としてこの全国巡回展を企画実行された主催者側すべてのご厚意が有難かつた。学園側の一人として深く感謝申しあげてこの報告を終わります。

（おおつぼ ひでじ・武藏高等学校中学校 元校長）



忠敬先生おおいに語る—前川家の接遇記録—

渡部 健三

文中には筆者注記

◇『測量日記』で測量隊の足どりを追う

享和元年（一八〇一）九月二十五日、三陸沿岸を北上中の第二次伊能測量隊は、仙台藩領唐丹村から盛岡藩領に入った。その日は釜石村（現岩手県釜石市）に一泊、次いで二十六日は大槌町（上閉伊郡大槌町）に止宿し、翌日は雨天のため逗留。

二十八日（西暦では十一月四日）の日記には

（前略）大槌村、それより吉里々村（きりきり村）大槌町
吉里吉里）前川善兵衛なるものあり。富家にて世々知ると
ころなり。もつとも、旧家にて三、四代以来は南部（盛岡
藩主南部氏）家中となり、富ははるかに劣れりといふ。立
ち寄りて一覽す。

と記されている。

吉里吉里に住む人たちは、この話をよく承知しているせいか、伊能忠敬と前川善兵衛との出会いの様子を知りたがっていた。

平成16年11月20日『岩手日報』は、

“伊能忠敬”寄つて居た—大槌の豪商・前川家に
との見出しで、前川家古文書の発見と解説を報じたので、企画展開
催期間中に出向いた。
ここであらましを紹介したい。

◇前川家小史と同家記像の発見

吉里吉里といえれば井上ひさし氏の小説『吉里吉星人』で一躍有名になつた土地柄である。

その吉里吉里の前川家は、「三都（京・大坂・江戸）二名の聞得し
善兵衛」（『飢餓考』）とか、「みちのくの紀伊国屋文左衛門」などと囁
されるほど、江戸中期には盛岡藩を代表する巨大な商人資本として、
「吉里吉里善兵衛」の異名で知られていた。

『当家代々記録』と系図や過去帳などによれば、もと伊豆の清水富
英なる者が小田原北条氏に仕えて相模國前川邑に家領を与えられ、津
方（港津・船舶）関係を担当していた。しかし、北条氏が滅亡したた
め廻船で奥州に逃れ、さらに、その子の富久が吉里吉里浦に移住して
前川家を創始したと伝えている。

二代善兵衛富永が元禄期から廻船問屋として台頭すると、閉伊地方
の水産物や豆類などの他領移出を中心に経営を拡大するとともに、付
近一帯の漁業権を掌握することになり、次第に酒・味噌の醸造業も手
がけることになった。

三代善兵衛助友は自ら建造した大型廻船数艘による交易で、江戸・
東北を結ぶ東廻り航路を開拓し、とくに漁業資源を商品化していく。

このような商業活動は、三陸沿岸の漁業生産地帯に恒常的な御用金
上納者を育成しようとする盛岡藩の政策に便乗することにもなり、延
享から宝暦の前半が最盛期であったと考えられる。

やがて、宝暦期を境として、盛岡藩の御用金徵収政策の犠牲をも強
いられた。とくに宝暦三年（一七五三）、幕府から日光東照宮修復の命
を受けた南部藩が、七万両という費用を藩内の富商らに割り当てたと
き、四代善兵衛富昌は七千五百両を捻出せざるを得なくなつたため、
さしもの前川家の経営も傾きはじめたといわれている。

岩手日報 2004年11月20日

伊能忠敬 寄っていた



前川善兵衛の古文書解説で見つかった佳能忠敬の大権訪問を伝える資料。パネル

大槌の豪商・前川家に

町
記録発見か
測量や歎談の様子

江戸時代に全国に名をはせた「二海の豪商」前川善兵衛（通称・吉里吉里善兵衛）の顯彰事業として前川家歴代の古文書解説を進めていた大槌町は、日本最初の実測地図を作製した伊能忠敬（一七四五～一八一八年）が測量の途中、前川家に立ち寄った際の記録を発見した。歎談の様子や測量経過がつづられ、当時の貴重な研究成果だ。町立図書館で二十日から開かれるミニ文化財展で資料の一部を公開する。

きょうから一部公開

伊能の記述が見つかったのは、前川家文書「不時臨時公私所用留」の一節。三陸沿岸を北上しながら測量した伊能は、「伊能氏は一享和元年九月二十五日」に釜石着、大槌で二十六日から後藤茂治た。「茶、餅菓子のほ

方に泊し、二十八日に同町吉里吉里の第六代善兵衛（富長）を訪ねたと

いう。

文書には「伊能氏は勘解由を名乗り、一人の家来を連れ、山駕籠で訪

か、初めての訪問先では飲まないという酒や吸い物、肴二、三種を差し上げた」とある。

内に約60%が終わる予定だ。

同町の佐藤千穂子解説員は「伊能の記述部分は解説作業中に見つかって、膨大な資料の中から存正と確認できて驚いた」と語る。

前川家文書は約三千八百六十点に及び、藩制時代の水産業や経済構造を知る資料として水産総合研究センター（元水産庁）

中央水産研究所)が所蔵
町は二〇〇二年度から原
文をCD-ROM化(全
三十八巻)し整理事業を
展開。解説作業は本年度

「研究成果の発表は初めてとなる。郷土の先人を知る機会になればいい」と来場を呼び掛ける。同展は二十八日まで開かれ、町内で出土した木製品などを展示する(二十一、二十三日は休館)。

つまり、御用金賦課への代償としての特權は形骸化したといえよう。

一方、宝曆の大凶作の翌年、大槌通では多数の餓死者があつたとされ、このとき善兵衛は私藏を開き、大槌・吉里吉里両村の難民や往来の人びと延べ三万二千人に雑穀を振舞つたとの記録もある。

五代善兵衛富能は斜陽化を必死で食い止めようとしたが、不漁続きたいう不運も重なり、やむなく事業の縮小を余儀なくされた。

忠敬の前川家訪問は、六代善兵衛富長（一七七一—一八四二）の代であった。富長は当時三十歳前後のはずである。その八年後、那珂湊の近藤民四郎より造船費を借り受け、廻船「吉祥丸」を完成させていが、さらに六年後、江戸表に出航中の御免石船「明神丸」が銚子川口で破船するという不運に見舞われることになる。

（以上は『図説岩手県の歴史』ほかを参考にした）

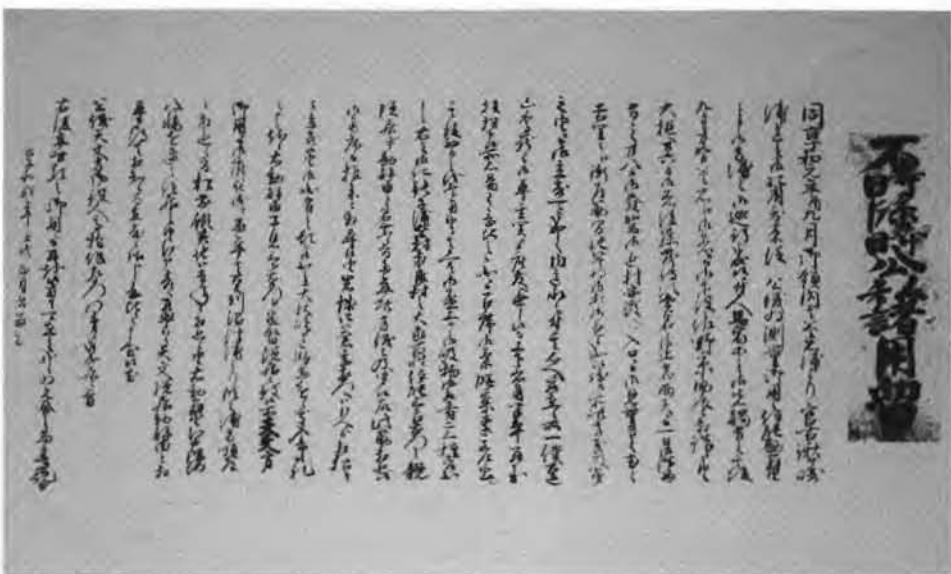
現在は、最盛期にくらべて同家の所有地は狭くなつたとはいものの、ご当主は健在で、近くの前川家歴代の墓（町指定文化財）や前川稻荷神社が往時を偲ばせている。

◇ 前川家文書

いわゆる前川家文書は約三千八百点あり、藩政時代の水産業や経済構造を知る資料として水産総合研究センター（元・水産庁中央水産研究所）に所蔵されていること。

大槌町は二〇〇二年度から整理事業を開始し、解説作業を継続しているが、その成果のひとつとして「伊能忠敬の前川家訪問」関連資料を展示した。前川家に伝わる『不時臨時公私諸用留』のうちの貴重な記録である。

展示パネル



〔解説文〕

同享和元年酉九月、御領内者釜石浦より、宮古鉢ヶ崎浦迄之御配府到来、從公儀為測量御用之伊能勘解由と申す御方、浦々御巡行被成ニ付、人馬宿等之御先触有之、其後九月廿五日釜石へ御着ニて、御下役佐野京助殿被相詰候由大槌へ廿六日御着、後藤茂伝次壳名ニ御止宿、雨天ニ而一日御滞留有之、廿八日御発駕御廻村、安渡へハ入口ニて御見量有之、直々吉里々々へ街道筋、間地竿為御打、御通被成候然ル所、此方義及御聞之由ニテ、御立寄可被成之内意承候ニ付、其心へニ罷在候所一僕召連山駕籠ニテ御尋、玄関より座敷へ通申候て、上下着用半平罷出挨拶申候所、心易く念頃之御咄ニテ、召席御茶、餅菓子等差出シ其後初て之儀、不被用由ニは候へ共、

御盃上ヶ御吸物、御取肴二、三種差出シ

申候 右の御仁、銚子浦近村相良村之大家、百姓伊能三郎右衛門之親隠居シテ勘解由と名乗候旨、多年此方儀被及聞候故、此筋相廻候

御用序て推參被相尋候由、岩城四ツ倉甚左衛門へハ同人より相招キ

被立寄候由御咄有之、頓て御出立、大沢峠迄舖當進候處、入念之御礼

被申越候 右勘解由子息、三郎衛門へ家督隠居被致候所、天文方御用ニテ御雇ニ被成ヲ、当年者豆州沼津浦より、段々浦方順道

被相廻候旨、松前蝦夷地ハ去年被相廻候由、右勘解由、江戸深河八幡近辺之住居之由、江戸表へ罷出候ハゞ、天文隠居勘解由と相尋候得は相知候間、立寄候様ニと念頃ニ被申置候 尤

右後年、此類之御用ニテ罷越候方も可在之哉と、為見合之當春書記置公儀天文方御役人高橋作左衛門、門弟ニ罷成居候旨、尤

享和式年壬戌正月書留置

〔現代文〕

同じく享和元年酉九月、²領内の釜石浦から宮古鉢ヶ崎浦（宮古市鉢ヶ崎）までの御触があつた。公儀測量御用の伊能勘解由といわれる方が浦々を巡行されるので、人馬や宿などの調達についてのお先触れである。その後九月二十五日釜石に到着され、下役佐野京助殿が詰められたとのこと。

大槌二十六日ご到着。後藤茂伝次壳名（測量日記では藤屋伝兵衛）にご止宿。雨天のため一日滞留された。二十八日にご出発、ご廻村。安渡（あんど）（大槌町安渡）では入口で目測があり、直接吉里吉里へは街道筋に間地竿を打たせて通られた。

ところが先方様は当方のことをお聞き及びらしく、お立ち寄りくださるとの御内意を承つたので、その心づもりで待機中、伊能様は下僕一人を従えて山駕籠でお訪ねくださつた。

玄関から座敷へお通しし、半平（六代目善兵衛富長の通称）が棒を着用してご挨拶したところ、心やすく丁寧なお話ぶりである。お茶、餅菓子などをお出しし、初めての訪問先では召しあがらないとのことであるが、お盃を上げ、お吸物、酒肴二、三種を差し出した。



付近の参考図

お話によれば、このお方は銚子浦近村の相良村（佐原村）の大家、

百姓伊能三郎右衛門の親で、隠居して勘解由と名乗っているが、私どものことは多年にわたり聞き及んでいたので、御用のついでに訪問したいと思い、まわり道されたとのこと。なお、岩城の四ツ倉甚左衛門（前川家との商売仲間か）では同人から招かれたとのお話であつた。

ご出立され、大沢峠（通称四十八坂。吉里吉里・船越間にある難所）まで弁当をお届けしたところ、入念のお札を申し越された。

右、勘解由氏は子息三郎右衛門へ家督を譲り隠居されて天文方御用に雇われているが、今年は伊豆沼津浦から逐次海辺伝いの道をまわつてきだし、松前蝦夷地は昨年まわられたとのことである。

勘解由氏は江戸深河（深川）の八幡宮近くに住居があるので、江戸表に出たときは、「天文隠居勘解由」とお尋ねになれば分かるから立ち寄られたいと、ねんごろに申されていた。もつとも、公儀天文方御役人高橋作左衛門の門弟になつていてある。

右、後年、この類の御用でお出でくださるお方もあるかと思われるのでは、その対応の参考のために、この春に書き留め置く。

享和弐年壬戌正月書き留め置き

* * * * *

本稿作成にあたつて、前川家文書の解説を担当された金崎昭文氏からご教示いただき、また、伊藤栄子さんにご校閲を賜りました。厚くお礼申しあげます。

（わたなべ けんぞう・

無明舎出版『伊能測量隊、東日本を行く』著者、盛岡市）

忠敬を詠んだ短歌と俳句 渡部 健二

第三九号には、山本公之さんが短歌を、また武川芳男さんが川柳を紹介されていましたが、ここでは新聞・雑誌などで見かけた作品をご紹介します。

馬場 あき子 選

忠敬が來り測りし唐丹湾望洋の丘に星座石あり

盛岡市 熊谷 ながよし

【評】伊能忠敬は近世中期の測量家。釜石市の唐丹にその天文学上の課題解決から発した測量の事績が残されていて、感慨深い。

『岩手日報』平成二年一二月二一日夕刊「日報文芸」
小著『伊能測量隊、東日本をゆく』（無明舎出版刊）
で紹介した作品です。

田谷 鋭 選

ある時は歩幅に測りし蝦夷の地か伊能大図を幕張に見つ

八王子市 小柳 清治

【評】伊能忠敬は江戸後期の地理学者、測量家で上総出身。ここでの「幕張」も千葉の地名。自分の歩幅を承知して、ある時は測量に役立てたのか。興味深い作。

『読売新聞』平成一七年二月二八日「読売歌壇」

忠敬の測りし道や寒鶴

盛岡市 野村 房子

『いわて・ねんりんクラブ』平成一七年二月号「俳壇」

「忠敬を詠む」(三) 伊能

洋

前にも述べたように、決して佳句とは思えないが、記録としての意味もあるうかと、十年ほどの間に山曆誌に載った忠敬関連の何句かをお目にかける。

洋句帖より(山曆同人)

秋燕忠敬偲ぶ星座石

釜石・唐仁町

忠敬の墓所あかあかと桜墓
忠敬の四人の妻や彼岸花

佐原・觀福寺

伊能図に釜山の山の名白木槿
青葉潮最南端の「伊能之碑」

対馬韓国展望所
屋久島にて記念植樹
小倉・測量記念碑除幕式

故郷の蔵がらんどう花薺

忠敬に見せむと玉の浦椿植う
秋高し一步を踏み出す忠敬像

福江島より

鳥渡る平戸に出会う忠敬図

富岡八幡宮銅像除幕式

秋海棠量程車に乗り遊びしよ

深川の忠敬像に初詣

秋燈しラランデ曆書細字なる

間重富遺品

幕引くや春光を指す忠敬像

九十九里忠敬像除幕二句

早春の潮の香とどく忠敬像

別海・忠敬記念柱除幕

酌む酒は「忠敬」にして年新た

春の星函館山の忠敬碑

夏茱萸の跡かたもなし土蔵裏

忠敬旧宅

エゾキスゲ最東端の測量地

日大文理学部展二句

風抜ける忠敬書斎柿若葉

伊能図の冬の海踏む百歩かな

測量隊足跡取材隨行記

垣見壯一

記には「霧雨」とあるが、霧雨程度では記帳することも無いだろうからやはり「あれ」だろうと素人三人で了解する。

ちなみに、山形の雪の初日は一九一八年十月二十五日（理科年表）、新潟の同年十月から、毎日曜日に掲載している「道・時空を越えて」に伊能忠敬の越後での測量経路を取り上げたいから、県内の行動とエピソードを知りたいとのこと。早速、小林支部長と対応、「糸魚川事件」と海府（笹川流れ・山北町・村上市）の誠実な村民を提案した。記事と写真は現地を見てとのことなので神田さんの取材に山浦会員と同行する。

村上市岩船港から伊能測量ルートを逆行、測量日記と大図で地名を確認しながら海岸に沿った道を北上する。雨天のためか人影も少ない。建築学者ブルーノ・タウトが「眼前を去来する風光の変化は言語に絶する」と贊美した笹川流れは、朝日連峰が日本海になだれ込む荒々しくも美しい風景と、観光地特有のざわめきと音楽放送もなく海鳥の鳴き声と自然の音のみの静寂に心がやすらぐ。

時折激しくなる雨に測量日誌の「馬下峠の下り口にて霖雨に逢」を話題とする。時節的に早い気もするし、千葉県史料測量日

十月二十五日（理科年表）、新潟の同年十月の気象記録に「中旬以降ノ温度ハ激変ニシテ霰雪ヲ降ラシ俄ニ寒氣早来セリ」とあり、享和二年「諸国洪水・出羽庄内洪水。文化年間江戸大雪・隅田川凍結」の記録もあり、当時冷害飢饉も多く相当寒冷な気候であつたと思われ、北国初冬の測量外業の苦労を忍ぶ。

「海府通行三日之内風波なく、是ハ村々貞実の徳ならんと感しけり」の好天を喜ぶ測量日記も納得する。

勝木海岸で、薪を燃やし海水を長時間煮詰めた塩と海草ホンダワラによる藻塩の素朴な製塩所があり、海府（海の部）という地名に古代から製塩が有つたものと考えられる。薪の炎と村人の心温かい対応が二百年前に思考をタイムスリップさせる。

神田・山浦さんも赤々と燃え上がる薪の炎をとおして測量隊の難所越えや、海上の小舟に忠敬先生と郡藏さんの姿が見えたのではなかろうか。

海岸の岩場に壊れかかたお堂があり、

小川未明の「赤い蠟燭と人魚」の物語を思う。古いお堂なので忠敬先生も見たのではないか、神仏を敬する人だから手を合わせただろうと三人で想像をたくましくする。

地元の郷土史研究家（教育長として教育現場に伊能測量の実習を実施）本間陽一先生に測量隊宿泊地等に含蓄のあるお話を戴く。

大難所の無類の絶景と今も変わらぬ村人の素朴な心の温さに魅了され、退職後は測量日記に従い十月十二日越後測量起点の庄内領境から、ホコ立、ボタン岩（伊能日記に敬意を表してか五万分の一地形図に記載あり）等記名岩石や、白砂の海岸は減少したけれど卑・潤等を頼りにたどりたい思いを強くした。

記事は好評で神田記者の透徹した眼は、「言葉通り、ここで中断していたら、歴史はどう回つていただろう」と幕末開国時に伊能図が果たした役割に的確な評価をくだしつつ、末文の「病や体力の衰えと闘いながら：第二の人生にかけた男の挑戦。その魅力に引かれ、足跡をたどる旅に出るひとは、今も少なくない」という心温かい文に感動を感じた。

（かきみ そういち・新潟市）

・・時空を超えて・・

忠敬の足跡を追つた日曜日

山浦 佐智代

新潟県北部に位置する山北町（さんぽくまち）。海岸線には『笹川流れ』と呼ばれる景勝地がある。日本海の荒波に、もまれて出来た奇岩や奇岩礁が、白砂と交じり合い十一キロにもおよぶ美しい風景を、創り出している。

千八百二年（享和二年）伊能忠敬（当時五十八歳）は、第三次測量の一環として、山形側からこの山北町に入っている。

この時の忠敬の測量日記には、笹川流れを絶賛、山北町の人々の親切に感動し、感謝していたことが記されている。

五月の或る日、新潟日報（本社・新潟市）の記者が、忠敬の足跡を求めて山北町を取材する、という話を聞いた。情報発信者は新潟支部の垣見さん。取材する日は五月十五日（日曜日）。私は、その『取材』の話にとても興味を引かれ、急用さえなければ、ついていきたいと、垣見さんにお願いしておいた。

当日何とか都合がついたので、日本海東北自動車道の中条インターチェンジ（笹川流れ

まで四十数キロの地点）まで出向いた。そこで、垣見さんを乗せた新潟日報編集局の神田敬輔さんの車に同乗させていただいた。

前日の天気予報では、曇り・一時雨・後晴れの変化の激しいものであったが、この予報は見事的中した。笹川流れに向かう途中、雨がボツボツと降り始め、徐々に雨脚を強めていった。忠敬が、通つたと思われる場所を探す頃には、ついに土砂降りの雨になってしまつた。しかし、昼食休憩を取つている間に、雨雲は少しずつ消え去り、晴れ間ものぞくようになつた。

車中では、垣見さんが、神田さんに、二百年前に生きた忠敬の業績や人柄について、わかりやすく話されていた。私も、注意深くその話に耳を傾けていた。

この日は、地元の歴史に詳しい元教育者の本間陽一氏を訪問することにもなつっていた。雨が少しだけ上がり始めた頃、お宅に着いた。

本間氏は、おだやかな面差しで、私達を迎えてくださり、測量に使用した船の大きさや、忠敬が逗留した家の御子孫のことや、山北町の人々の親切な対応のことなど、資料を広げながら、わかりやすく話してくださつた。

（やまうら さちよ・三条市）

ず『唐爺や』と呼ばれていた人物のことにも及んだ。『唐爺や』とは、十代の時、出漁中、嵐に遭い遭難。漂流している時にアメリカの船に助けられ、その後、長い年月を経て幕末の混乱期に日本に戻ってきた、山北町出身の人のことなのだ（明治四三年八十歳で死去）。有名なジョン万次郎と同じような経験をした人が、越後にも生きていたのだ。私は、この日、教科書には載つていない歴史上人物を知る機会を得たのだった。

お話を伺つているうちに、外の雨は、すっかり上がりついた。三人は帰路についた。

六月十二日、神田さんが書かれた、伊能忠敬の測量行脚の記事が、糸魚川事件のこともおりませて、新潟日報紙面に掲載された。

新潟県内の道を過去に通過した人物や事物を、時空を超えて紹介するもので、伊能忠敬は、シリーズ十番目の登場となつた。記事には、笹川流れの美しい風景の写真が、添えられている。

私は、忠敬も感動したその笹川流れを、また訪ねたいと思つた。

道

時空
を超えて

10

奇岩奇石が日本海の波間に漂つ。沖合に要島を臨む山北町「笛川流れ」。全国測量を続ける伊能忠敬（一八一八年没）は、越後路の旅を景勝の地からスタートさせた。一八〇二（享和二）年十月十一日のことである。

このときの測量隊は美子秀藏をはじめ七人編成。「人生五十年」といわれた時代、一たん心と体を休ませてくれたの日十ヶ、二十ヶの行程起伏が、「松島と勇闘の美鏡」を

奇岩奇石が日本海の波間に
に草んだ長い海岸線は、當時
五十八歳の身にしたえたに連
続する伊能忠敬（一八一八年
没）は、越後路の旅を景勝の
地からスタートさせた。一八
〇二（享和二）年十月十一日
のことである。

このときの測量隊は美子秀
藏をはじめ七人編成。「人生
五十年」といわれた時代、一
たん心と体を休ませてくれたの
日十ヶ、二十ヶの行程起伏
が、「松島と勇闘の美鏡」を

早朝からの実測や地図づく
り、天体測測で、日々の疲れ
をもぎ取る。しかし、それでも
何處かで、必ず「おはよ」と
おはよの言葉をうながす。おは
よの言葉は、おはよの言葉をうな
がす。おはよの言葉は、おはよの
言葉をうながす。おはよの言葉は、
おはよの言葉をうながす。

心休ませた無類の絶景

現地との摩擦で辞意も

わせ持つ」といわれる名勝である。船上からの眺めを忠敬は「奇岩奇石おほく、山麓岩上の奇松、絶景無類なり」と絶賛している。国道345号沿い、幕末の志士、頬三樹三郎の碑がある。篠川流れでは、人々の振る舞いにも感謝している。測量隊のため、板倉から篠川地区に向っている。

A black and white micrograph showing a longitudinal section of a root tip. The image highlights the vascular cylinder, which is a central column of tissue, and the endodermis, which is a layer of cells lining the inner surface of the root. The xylem and phloem regions within the vascular cylinder are visible as distinct layers. The overall structure is elongated and tapered towards the bottom.

国会図書館所蔵の伊能図大図のうちの1枚（柏書房）。日本海に浮かぶ粟島のほか、寒川村、脇川村などの地名が記されている。

魚川事件」である。

糸魚川に入った一行に現地の役人が「姫川は急流で河口は渡れない」と断った。しかし実際には河口は容易に渡れたことから、忠敬らにはこれが危ういが妨害と映り、「これほど粗末な扱いを受けたことはない。江戸にて申し立てる」と言ったとされる。だが、糸魚川領主が「不行き届きの事実はないがかった」として、逆に幕府勅定奉行に訴え、騒ぎが広がっていった。

第十一次にわたる測量で、本
県には一度入っているが、事
件は笛川流れを南下した第三
次測量の翌一八〇三年、第四
次最中に起きた。「伊能忠
敬の糸魚川事件」の著者、小
野智司さん(九)糸魚川市二

— 30 —

国の天然記念物に指定されている山北町「笹川流れ」の眼鏡岩海岸付近。伊能忠敬が「無類の絶景」と褒めたたえた奇岩や白砂が、200年前と変わらぬたたずまいを見せている=写真部・佐藤隆撮影



業を支えた
した地方
かった」
返る。
しかし
いたわけ
つかの魔
の象徴と

、絶えず順風の中に
ではなかった。いく
擦も起きていた。そ
いわれるのが、「系
たのは伊能隊が通過
の住民の協力も大き
と、垣見さんは振り

月刊『文藝』の二月号に、『不思議』の二回目が載った。題名は『魔羅の魔羅』。この二回は、魔羅の死後三年だった。病弱体力の衰えと鬱鬱、隠居後の第二の人生にかけた男の挑戦。その魅力に引かれて、足跡をたどる旅に出る人は、今も少なくない。この二回は、『魔羅の魔羅』の七

忠敬は一八一六年、三万五千キロに及ぶ全國鐵道を全うする。「地球の大きさを知りたい」「日本を測る」という夢と好奇心を道連れに、足かけ十七年の偉業だった。このうち、越後路の測量に要したのは延べ七十三日。道のりは全

軍家齊は精巧さに恵をのんだ
といふ。幕府は直ちに日本全
土の地図作製を命じた。ボラ
ンティアの扱いから一転、國
家プロジェクトに格付けされ
たのである。
実測による初の日本地図
「大日本沿海輿地全圖」が完

でしよう」伊能忠敬研究会回っていたらう。新潟支部の垣見士一さん(七)「新潟市」は興味深そう話。

性格が強く、地元の対応を量的用意手伝の儀に従容施下れほど丁寧に記述している例されど、と辞意ともどれる記述がある。言葉通り、(この)ではほとんどないといわれている。よほほ、印象が良かつたら、中断して、たら、歴史はもう

「測量日記は作業日報的なもので、二度にわたって裏切られた。」

に至る山道を補修し、新道をつくりてくれたのだ。お触れが出ていたとはいえ、お盆休み返上の作業だったたゞだ。大難所を気持ち良く通過できたことに「口記では、人々の品古風にして純朴」(村々)と推察する。

測量が地方にはほとんど理解されない時代である。真偽は不明だが、小野さんは情報不足に加え、忠敬らの行動が、領地や石高を調べる「検地」ではないかと誤解を与え

『旗門金鏡類録』（八）

小島 一仁

享和大洪水のことなど

前回は享和元年（一八〇一）の門訴未遂事件について記したが、『金鏡類録』第四冊の後半には、それについて、享和二年に大洪水があつたことが記されている。この年、六月上旬から日照りが続き、旱損になるのではないかと心配されていたが、六月二八日からは、一転して、昼夜大雨が降り続き、江戸近在では大洪水となつて、江戸永代橋などが流失した。利根川筋でも、何か所か堤が切れたが、佐原村では、

本田新田ともに水当りが強く、村役人たちは昼夜出勤して水防につとめた。七月中に、地頭所の役人が廻村し、八月になると、代官滝川小右衛門の手代が新田検見のために廻村に来た。このとき、代官手代から、伊能三郎右衛門と永沢治郎右衛門に対して、「公儀から扶食と種の貸付がある筈だが、諸方の事で、なかなか行き届かぬので、両名で、金三百両用立ててほしい」という申し入れがあつた。しかし、両家は「近年甚だ不商内で損毛仕り」としてこれを断り、その後、金百五十両用立の申し入れがあつたが、それも断つた。

「近年は、毎日、朝から暮まで一人白米一合程づつ施してきたが、午（寛政十年・一七九八）の夏から年々米値段が高くなつてきたため、乞食非人がおびただしく、普通の日でも白米四、五升づつ差し遣してきた。しかし、この節からそれを減じ、村内本田・新田の貧窮人へは今まで通り絶えず合力を施し、村内はもちろん、近郷の類焼の者は、は火事見舞と名付けて見届けてやるようにして、組内で御年貢や村入用を納め兼ねる者には取りはからいをしてやるようにしている。」
お上からの用立金は断つても、近隣の困窮者への施しは、絶えず続いているということであろうか。

名主伊能三治郎

文化五辰年（一八〇八）閏六月二五日、滝川小右衛門代官所から、村次順達の触書が到着した。

「前々から忠孝奇特により、公儀から褒美を下された者をもれなく調べ、褒美を下された年月、その名、年齢、行状を書き記して、当月末までに申し出るよう」

佐原村からは、まず、宝永二年褒美の名主勘解由三十八歳（伊能景利）、享和元年の百姓伊能三郎右衛門三十六歳（景敬）、と同人父伊能勘解由（忠敬）の名があげられ、その行状もくわしくのべられているが、それは前に箱訴の件で記したことと同様なので省略する。次に、

たま、自分（景敬）も在府中であつたので同行し、年貢の引方を頼つたところ、米四百俵を下された。

そして、この件は、次のような記述で結ばれている。

「近年は、毎日、朝から暮まで一人白米一合程づつ施してきたが、午（寛政十年・一七九八）の夏から年々米値段が高くなつてきたため、乞食非人がおびただしく、普通の日でも白米四、五升づつ差し遣してきた。しかし、この節からそれを減じ、村内本田・新田の貧窮人へは今まで通り絶えず合力を施し、村内はもちろん、近郷の類焼の者は、は火事見舞と名付けて見届けてやるようにして、組内で御年貢や村入用を納め兼ねる者には取りはからいをしてやるようにしている。」
お上からの用立金は断つても、近隣の困窮者への施しは、絶えず続いている」ということであろうか。

明和三年（一七六六）褒美の百姓仁兵衛六十四歳（永沢軒景）と宝暦八年（一七五八）の百姓永沢治郎右衛門（征俊）、明和三年の其の子永沢治郎右衛門（俊順）の三名が凶作に際して困窮人を救つた行状が記されており、特に永沢征俊については、佐原淨国寺の永沢家墓地内に建てられた顕彰碑の碑文をのせていく。「了玄翁済貧恤窮紀略」と題して儒者亀田鵬齋（かめだぼうさい・一七五二—一八二六）が記したものである。

ところで、この「忠孝奇特」の者についての記述を読んでいて、小さなことではあるが、はじめて気づいたことが一つある。このとき、代官所への報告書の差出人が、「名主伊能三治郎」となっていることである。この三治郎というのは、景敬の長男三治郎忠誨のことである。

「名主三治郎幼年ニ付代、元名主半十郎」と記されているところもある。三治郎忠誨は文化三年（一八〇六）の生れであるから、この時、数え年で三歳であった。門訴事件のとき名主であった半十郎（半重郎）らが退役した後、名主として適當な人物が見つかなかったのである。三治郎の父景敬は、家督をついだ時から、名主より上座の村方後見の役についていた。それで、おそらく、やむをえず、三治郎を形式的に名主ということにしたのであろう。

わたしは、忠誨が、少年時代から曆学修業のために江戸に出ていたので、村政とは全く関係がなかつたとばかり思つていていたのだが、今回『金鏡類録』を読みかえしていく、はじめて、形式的とはいえ、彼が名主とされていたことに気づいたのである。

『金鏡類録』第四冊の最後は、「伊能家系年譜」という記録によつてしめくくられている。伊能家には『家牒』という先祖書があるが、この「家系年譜」も先祖書である。この二つの先祖書は、内容でも書き方でも、かなりのちがいがある。

『家牒』は、前に本誌第二六号（二〇〇一年七月）で記したように、墨付紙八〇枚ほどの記録で、先祖から江戸時代のことばかりでなく、近代に入つて、「十五代目伊能康之助」までのことを記している。このうち、江戸時代に書かれたのは、形式上からいえば「七代目昌雄」のところまでで、「八代目家慶」（忠敬は「十代目」とされている。）以後のことは、康之助氏室の多嘉子さんが『金鏡類録』等を参考にして一九二〇年代以後に書き記したものである。

「伊能家系年譜」の方は、墨付紙二五枚ほどで、記述は文化六年（一八〇九）八月に、忠敬が九州測量に出発したところまででおわつてゐる。『家牒』にくらべて「家系年譜」の紙数がはるかに少ないのは、忠敬以後、幕末から近代にかけての記述がなされていないためといふよりは、むしろ、先祖書として、整理した書き方がされているためと思われる。『家牒』の方は、幕臣から來た書状の写しを何通ものせていたり、「矢作領村附之事」、「勘解由持反別之覚」、「伊能壹岐隠居地」、「伊能三郎右衛門昌雄死去之節田畠屋舗持反別之覚」などの記述に多くの紙数を費しているのだが、「家系年譜」の方は、そのような記述は、すべて省いている。

文字の書き方は、『家牒』は普通の行書体で書かれているが、「家系年譜」は、楷書の漢字と片仮名を用いている。左に、その書き出しの部分だけを掲げておこう。

伊能家系年譜

本姓藤原氏

右衛門尉守善景利景綱景預

世々大和國高東
西田郷に住る

景預ノ子神右衛門太夫景能

平城天皇ノ勅乃

蒙リ大同二年丁未九月十日下總國香取郡大須

賀莊ニ下向シ伊能村ニ住ス始テ伊能ヲ以テ氏

トシ其地ニ春日明神ヲ勸請シ氏族ノ鎮神トナシ

大須賀明神ト号ス今伊能村大須賀明神是也

田記二如此
故名別名故平姓ヲ稱ス景能

ヨリ子孫世々伊能ニ居リ大須賀莊ヲ領ス景宗

一 同七年春正月腰勅解由玄已正月九日御前用
出立と申す事林太郎領地山中より住候家系
年譜を記す事と號外書狀と字

一 著者玄巳正月腰勅解由玄已正月九日御前用

腰勅解由玄已正月九日御前用

さて、前に『金鏡類録』全体の編集者は、忠敬の長男の景敬であると書いておいたが、この「伊能家系年譜」の作者は、景敬ではなくて忠敬である。そのことは、文化七年（一八一〇）五月に、景敬が「林大学頭様御用入人中」にあてて記した書状の写しがここに載っていることによつてたしかめることができる。

以下の通りである。

（宛名用入氏名四人省略）

伊能玄巳

六月五日

○解説文

一同七午年五月廿一日親勘解由去已八月中九州測量御用
出立之節申置候付、林大學頭様御用人中江向伊能家系
年譜為差登候節相添候書状之写

一筆啓上仕候、向暑之時節御座候得共、祭酒様益御機
嫌能被遊御座恐悦至極之御儀奉存候、次各様愈御安

泰被成御座珍重之御儀奉存候、然者先達同苗勘解由
祭酒様江先祖より歴世御文章御願申上候付、去秋

中御用而九州発足之節も先祖行歴之記差上候様

私江申付置、猶又当春御用先より右之趣申来候間
今般差上申候、勿論右行歴之記は同苗致筆記

置候江私儀注杯江聊之加筆仕甚瑣屑之事共

有之候を其付而清書仕奉入御高覽候儀何共

奉恐入候御儀に御座候得共、私家之分際別段是と申

擇分可申上盛奉も無之事候間右之付而奉差上候、可
然御被露奉願候、尚同苗儀当暮秋来正月迄付は

帰府可仕様御座候得ば何卒当暮迄付御作文被下

置候様御願申上度奉存候、此等之段期限申上相願候
儀重々恐多奉存候得共可相成候ハ右様御出来被下
置候様御執成奉願上候、右之趣亘敷御披露被成下度
奉希候、右御願申上度如斯御座候、恐惶謹言

五月廿一日 伊能二郎右衛門

この書状によると、忠敬は、文化六年八月中、九州測量に出発するに際して、景敬に対して、「先祖行歴之記」を「祭酒様」（林大學頭）に提出して文章を見てもらうように命じたものようである。そして「右行歴之記は同苗致筆記置候は、私儀注杯に聊之加筆仕」とある。ここで「先祖行歴之記」といつてるのは「伊能家系年譜」であることは明らかであるし、これを忠敬が書き、それに景敬が少しばかり加筆したものであるというのである。

なお『金鏡類録』全体が景敬の編集によるものであるということは、第二冊から三、四冊にかけて「我等」という一人称がしばしば出てくるが、それはみな景敬をさしていること、また、「父勘解由」「親勘解由」などという書き方もよく出てくること、それに、第四冊の門訴事件のように、景敬以外の者には書ける筈のないことが出てくることなどで明らかであるが、その上に、「伊能家系年譜」で忠敬が書いた文章に景敬が加筆したということは、彼が『金鏡類録』の主たる編集者であることを物語つてるのである。

最初の忠敬伝

「伊能家系年譜」は、先祖書として、かなりととのつた書き方になっているが、佐原初代の景久から忠敬までの十人の当主のうち、忠敬のところに全体の約四分の一の紙数（四〇〇字詰で約五枚）があてられている。編集者の景敬が忠敬より先に死去してしまったため、『金鏡類録』の記述自体が打ち切りとなり、忠敬のことも、九州測量のことまで終りとなっている。しかし、それでも、これは、最初の忠敬伝といってよいであろう。この最初の忠敬伝は、忠敬自身が書いたもので

もあるから、次に紹介しておきたい。

忠敬が隠居して江戸に出るまでの部分を、原文に振仮名や句読点などを入れて、読みやすいようにして書くことにする。括弧内に書いたのは細字の部分である。

忠敬 称三郎右衛門、後号勘解由。長由嗣、実ハ上総国武射郡小堤村
神保貞恒ノ男（貞恒称利左衛門、神保氏足利ノ末世ノ節右小堤
ノ皆ニ在シ神保称長門守泰宗ノ裔ナリ）、長由ノ女ニ配シ伊能ノ家
ヲ嗣ク。長由不幸ニシテ世ヲ蚤クシ、一女漸二歳、兄昌雄ノ遺命
ニヨリ南中村平山秀曉ノ家ニ養ハル。宝曆四戌年四月二十八日看
防伊能清茂死去ニヨリ、其秋母子トモニ家ニ帰ル。女年十四歳。
翌五亥年、清茂ノ男景茂ヲ迎テ家ヲ繼シム。同七丑年六月廿五日
景茂死ス、年十九。于時一子胎孕ニアリ。冬ニ至テ生ル。称三太
郎、号忠孝（同十三末年九月七日死、歳七）。同十二年十一月、貞
恒ノ男某伊能家ニテ迎エシニヨリ平山季忠（平山秀曉ノ嫡子也、
称藤右衛門）ニ介シテ御先代祭酒鳳谷公ヘ入門シ、実名忠敬ト賜
ハル（鳳谷公御父子君ヨリ被下シ詩章詩序并ニ画譲有之）。同十二
月伊能ノ家ヲ嗣キ、長由ノ女ニ配ス。忠敬看防ノ後ヲ受ケ父祖ノ
業ヲ繼キ名主後見タリ。于時歳十八、分家伊能豊秋扶輔ス（伊能
七兵衛某四世、称伊能七郎右衛門）。此時、家産或ハ減ゼントス。
忠敬志ヲ励シ業ヲ勤メ日夜不忘、僕素ヲ主トシ家事ヲ専ラニシ、
復興ノ功ヲ立ン事ヲ欲シ、先祖ノ志業ヲ守リ恩恵利沢ヲ忘レサラ
ン事ヲ常々心掛け、村方為ヲ存シ小民ノ救ニ成ルベキ事ヲ励ミ、
殊ニ天明三卯年同六午年、関東大飢饉、米穀高直ニテ諸人窮厄ニ

及ヒ所々強暴ノ愁アリシニ、忠敬、上方ヨリ米穀ヲ買入レ、価ヲ
減シテ是ヲ売リ且ツ村内近里ノ窮民ニ施シヲ与ヘシ故、強暴ノ愁
ナク事穏ニ治レリ（既ニ地頭所ヨリモ褒メ賜ハリモノアリ）。是只、
祖先ノ業ヲ守ラント欲スルノ故ナリ。安永七戌年六月、佐原村本
田民家ヘ新田ノ内ヲ加ヘ御料御代官所ヨリ御側津田日向守知行所
トナリ、於地頭所天明元丑年八月更ニ名主トシテ主宰セシメ、同
三卯年九月、苗字旅行帶刀ヲ許シ、同四辰年八月改メテ村方後見
トシ村役ノ上ニ居リ、令指揮。其後地頭所山城守代ニ至リ三人扶
持ヲ賜フ。同三卯年十二月廿九日、忠敬妻死ス、年四十三（長由
ノ女、嫡子景敬ノ母也。母ヘ至孝貞節ニシテ能ク家事ヲ輔ケリ。
忠敬復寛政二戌年六月仙台家ノ藩医桑原氏ノ長女ヲ娶リテ妻トス。
寛政七卯年三月十四日死ス）。寛政六寅年十二月地頭所エ隠居相願
ヒ、嫡子景敬エ家督ヲ譲ル。願ノ如ク後見役免シ隠居一人扶持ヲ
給ハル。同八辰年七月、地頭所ヨリ嫡子景敬（称三郎右衛門）ヲ
村方後見トシ三人扶持給ハリシ節、隠居一人扶持ヲ辞ス（景敬地
頭所ヨリ去ル同七卯年二月苗字旅行帶刀ヲ許サル）。忠敬（勘解由）
兼テ天文曆学ヲ好ミ世ヲ避ケシ後弥々相励ミ、適改暦ノ時ニ當
リ故高橋作左衛門ドノ其選ニ預リ高名ノ事ヲ聞キ、其門ヲ扣テ自
ラ学フ處ヲ相正ス。
(以下略)

右に書かれていることは、忠敬に関心をもつておられる方々は、た
いてい御存知のことばかりのようであるが、一つだけ書きとめておき
たいことがある。

天明の飢饉のとき、忠敬が多大の施与をして貧民を救つたことは、多くの忠敬伝に記されているが、それは、忠敬が同情心の厚い人であったことを示すような書き方になつてゐる。だが、忠敬が行つた施与合力の主要な目的は、打ちこわしを防ぐことにあつた。忠敬は、打ちこわしを防ぐには、役人の力でおさえてもらうよりも、困窮者に施与した方が効果的であると考えたのである。このことは、本誌第三六号で説明しておいたが、ここでまた、「米穀高直ニテ諸人窮厄ニ及ビ所々強暴ノ愁アリシニ、忠敬上方より米穀ヲ買入レ、価ヲ減シテ是ヲ充リ且ツ村内近里ノ窮民ニ施シヲ与ヘシ故、強暴ノ愁ナク事穏ニ治レリ」と記されているのである。小さな事のようだが、このことは、忠敬の商人的合理精神に関することなので、やはり、見落すことはできないと思う。

なお、先祖書というものは、主として代々の当主のことを記し、その家族、とりわけ、女性については、ほとんど書かないのが普通のようである。「伊能家系年譜」も同様なのであるが、忠敬のところに限つて、先代長由の妻（妻ミチの母）の行状が、欄外にではあるが、細字で、かなりくわしく記されている。

彼女は、南中村（多古町南中）の平山氏の娘であった。平山氏は、熱烈な日蓮宗信仰の家であったので、彼女は、伊能家に入つてからも、生涯、日蓮宗を守り通した。夫の長由の病中に、伊能家の仏壇（真言宗）とは別に、自分で日蓮宗の仏壇をかざり、わざわざ、南中村から日蓮宗の僧侶を呼んで祈祷をしてもらつたこともあつた。長由の兄昌雄は彼女の行動を許しておくことができず、一時は、離別することも考えた。そして、離別は思いどまつたが、死去する前に、今後、伊能家の中で日蓮宗を信仰することを禁止するということを遺命した。

ところが、忠敬が伊能家に入夫したばかりの時には、彼女は、伊能家の婦人をことごとく日蓮宗に改宗させようとしていたという。

忠敬家督初メノ事ニテ、其宗門ヲ建ントスレハ昌雄の遺命ニ背キ、建テザラントスレハ母ノ志ヲ折ク、進退甚ダ窮セリケレトモ、専ラ丹心以テ母ノ心ヲ慰メ、漸ク婦人日蓮宗ノ事ヲ相休ム、故長由妻、安永三午年十一月廿三日死ス、年五十二

忠敬も、彼女の行動には、よほど悩まされたらしい。そのため、わざわざ、彼女のことを書き残したのである。

（こじま いちじん・忠敬研究家、浄国寺院主）

筆者からのお便り

これまで取り上げてきた諸文献は、すべて、伊能忠敬研究に関しても、必読のものですが、実際に、これらの文献を読んだ人はごく少數でしょ。その意味で私の拙い解説も無駄ではなかつたかと思つています。



測量隊員たちが残したもの

B 一二四 伊能妙薰宛 尾形謙二郎書簡

文化一〇年五月二四日

〔原文〕 (前略)

安藤由紀子

事跡を御見し一同す。、
用ゐ難やうやくおなじと
おきりしと並て肥後國
薩摩見入時助役三人
をすお島役者三人
お手人三す引連
國界へお迎りれ行
きりぢ方とおやひ事も
難うれ事やるをあら
仕事もりきり、雇ひと
勤めだすお役みを五方
延々以て山川をうれ
行路三方りうれ、主とよ

〔訳文〕 (前略)

尊師御初、皆々一同無事ニ
御用相勤申候間、乍憚御安

意可被下候 然ば、肥後國より
薩摩差入之時、付廻り役人、

留守居添役並助三人、足
軽、用聞人足ヲ引連れ

國界迄出迎候處、何とも嚴
懇意相成申候て、一先安堵

重ニ候間、大ニ恐申候 夫より追日ニ
仕候 去三月三日ニ鹿児島へ

到着仕り、嶋渡仕度二、五六日
逗留致し。 (つづく)

〔口語文〕 (前略)

尊師 (隊員たちはみな、忠敬をこう呼んでいた) 初め皆々一同、無事に御用を勤めておりますから、ご安心ください。

さて、肥後國から薩摩へ入りましたときは、付回り役人として、「留守居添役」とその補佐役が三人、足軽や用聞き人足を引き連れ、国境まで出迎えに来たのですが、なんとも厳重な構えでしたので、たいへん恐ろしく思われました。しかしだんだん日がたつにつれて、おたがいに懇意になりましたので、一先ずほつといたしました。

去る三月三日 (前年、文化九年) 鹿児島城下に到着、二島 (種子島と屋久島) へ渡る仕度のため五、六日逗留し (ました) (つづく)

これから数回にわたって、測量隊員たちが記録したもの紹介していくことにしたい。

これらの記録は伊能家に私蔵されていたからこそ、今まで残つてき
たものであつた。無名の下働きの隊員たちの手紙など、文化財保護委
員の役人の目には留まらなかつたから、「重要文化財」の指定からもれ
て、伊能家の行李に眠つていたのである。

隊員の有能なトップであり、福江島（現、五島市福江）で客死した坂部貞兵衛の哀切な生涯については、八号から一一号まで四回にわたって述べてきたので、ここでは触れない。彼の死を心をこめて看取つてくれた福江藩に感謝して、その書状一一通は、伊能家から「五島觀光歴史資料館」に寄贈された。お墓もあることだし、この島の方がすわりがよさそうに思われたからである。

一九九八年、江戸東京博物館で行われた、「忠敬と伊能図」展の片隅に、この書簡がキヤブ・ション付きで並べられたのを見たとき、伊能陽子さんと、「今夜は乾杯しなきやね」と手を打ち合ったのを思い出す。

德光仏塔二三

「薩摩」という国は、豊臣政権も徳川政権も、そして太政官政権になつてからも、権力は終始これを不気味に思い、お世辞笑いのひとつもしなければならぬ独立性の強い軍事国家であつた。」

「江戸体制が強固であつた時代でさえ、頗るに境をとさし、薩摩飛脚」といわれた幕府の密偵が入つてくると、容赦なくこれを斬つたと、いう恐るべき国境こくとうであつた。」司馬遼太郎の『街道をゆく』にはこう書か正在る。

測量隊の二度目の薩摩入りは、文化九年二月二六日で、肥後の水俣から薩摩の大口にいたる。今の国道二六八号線をたどつた。地図に名前が載つていないので、先日熊本県立図書館のホームページへ
ジから質問したところ、『以前は「徳光仏山」とよばれたならかな峰であつたが、文政元年に頼山陽がここを通つたとき、その詩で「亀嶺」と詠つたので、以後「亀嶺峠」^{トカニラゲ}とよぶようになつた。文化九年に伊能忠敬が通つたのなら、まだそのときは、「徳光仏山」だつただろう』と



のお返事をいただいた。^{〔注〕}

肥後から薩摩へというところが、また怖いのである。上代以来両国は、それともに武を誇り、ともに独特の文化を積み上げ、ともに中央政権が誕生することに反乱を起こしていた。維新後も、熊本城下にあって神風連の乱をおこし、薩摩は西郷隆盛を総帥として西南戦争を戦つた。

古来図式もきまつていて、中央政権は、まず肥後をたたき、ここを基地として薩摩を屈服させようとしてきた。薩摩には「肥後の加藤（清正）が来たならば・・・」という古謡があるくらいだそうで、恨みが深いのである。

測量隊の二度目の薩摩入りの様子を伝えるこの手紙からは、淡淡とではあるが、隊員の緊張がありのままに伝わってくる。

中央政権の力は弱まりを見せ始め、それにつれて雄藩の力は相対的に強まりつあった。文化文政期のその危うい均衡の時代に、伊能忠敬の九州測量は行われたのである。幕府の威令は、全国にまだちゃんと行き届いていたし、かといって薩摩も、さほど中央を恐れる必要はなくなっていた。

薩摩では、藩主は孫の斉興があとを継いだばかりだったが、先代の隠居斉宣も元気、先々代のやり手の大隠居、島津重豪も相変わらず派手好みで、隠居が二人もいた。

大隠居の重豪は画策のすえ、長女茂姫を十一代将軍家斉の正室としていて、将軍の岳父として幕府に大きな影響力を持ち、琉球などを通じて多額の密貿易をおこないながら、これを容認させていた。この手紙に書かれた、測量隊の二度目の薩摩入りのころは六八歳、奇しくも忠敬と同じ年であった。藩の実権をいまだに握っていたうえ、好奇心が強く、浪費家で、藩は当時数百万両の借金をかかえていたという。

藩庁は、財政難の只中にもかかわらず、將軍の外戚としての体面上、幕府にたいして恥をかいてはならぬという強い脅迫観念を持っていた。

こうした微妙なバランスの中で、二回にわたる、九州滞在の実質合計が二年八ヶ月という、長期の伊能測量が行われた。忠敬はともかく、隊員たちは、薩摩入りのときはたいへん緊張し恐れ、薩摩の役人側も精いっぱい気を使い、かつ失敗を恐れていた。

「徳光仏峠」に現れた薩摩の一一行は、国境見回りのときのように、多分武装していたであろう。「何とも嚴重三候間」という文面から、推察できる。

二月二六日の忠敬の「測量日記」には、例によつて冷静に、事実だけが綴られている。

「朝より晴れ・・・肥後国芦北郡・薩摩国伊佐郡国郡領界、久木野より一里一一町五八間 それより薩州領（国境まで肥後の付廻り人三名が送つてきて帰る）・・・薩州留守居添役平田次郎八、外、椎原与三治、東郷八右衛門出迎、それより薩州領内案内」

最初の薩摩入り

前後するが、最初の薩摩入りはどんな様子だったのだろうか。

二年前の文化七年五月八日、このときは海辺で、志布志湾を東から西へ入国した。朝から曇りのなか日向国高鍋藩の今町出立、一〇時ごろから大雨になる。高鍋藩福島の代官一人と、絵師や用足し人足たちは、途中で「本当は、鹿児島領の志布志村までお送りするところですが、薩摩領は出入りが難しいので・・・」と言い訳けして帰ってしまった。

二回目の山中と違つて、ここは海辺で明るい。測量隊一行は、このときは何も心配していなかつた。

じつは、領内の付け廻り役の総責任者、「留守居付役」の薩摩藩士、野元嘉三次とは顔見知りであった。つい一ヶ月ほど前の四月六日、延岡城下の宿へ様子を見に訪ねてきて会つておつり、彼が国境まで迎えに来ることをすでに知つていたからである。

一行が、種子島・屋久島両島をも測量するつもりと知つた薩摩藩と

野元嘉三次を測量中の忠敬のもとに出向かせて、かなり早くから中止の交渉をさせていた。

野元嘉三次は、九州測量が二回に分けられたとき、いつたん江戸へ帰つた忠敬を追いかけるように入府し、自宅まで訪ねてきて中止の交渉をしたのだった。結局この願いは幕府によつて聞き届けられなかつたが、忠敬と測量隊一同は、野元の入柄をよく知り、その願いにも同情的だつたようである。先に述べた二度目の峠越えのときは、野元さんの顔が見えず、いつそう不安が募つたのだろう。

文化七年五月八日の「測量日記」は、次のようである。「朝六時、日向高鍋領今町出立、大曇天・一〇時頃より大雨・海岸大難所・

（高鍋領役人一同は、前述のように途中で帰る）・・・領界へ野元嘉三次・岩山雲八出迎え、雨中小船に乗り、志布志町に着・・・」

志布志の宿では野元さんから、全国に名の知れた、国産の泡盛と国分のきざみ煙草をもらい、それぞれに分配した。始めの挨拶として、手厚い贈り物を受けたのだった。

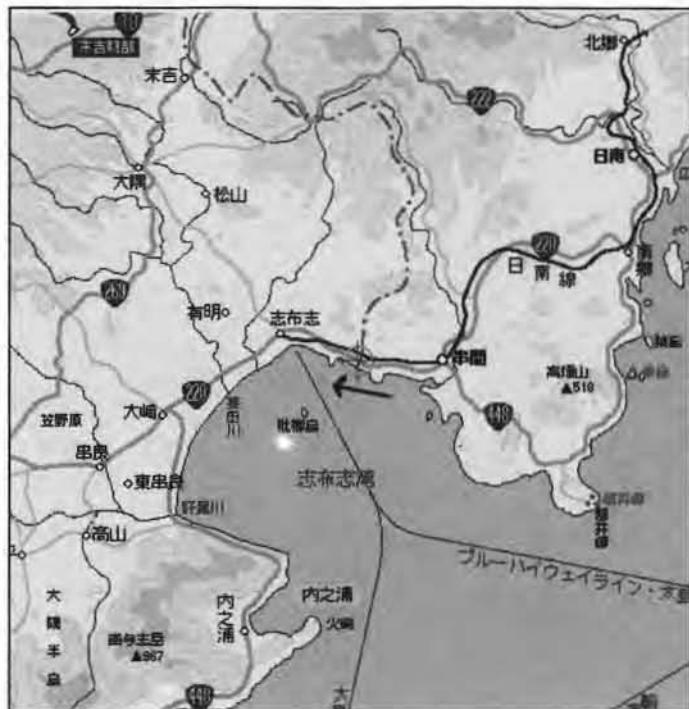
間もなく小者たちは、薩摩側の同輩とすつかりうつとけた。二年後の薩摩入りの時も、緊張しなかつたのは、小者たちだけだつたらしい。この最初の時に見知つた顔を、あちこちに見付けたからである。

隊員の格付け

これから、隊員の書いたものを紹介していくので、彼らのそれぞれの格付けについて、説明が必要だろう。

そこは江戸時代のこと、右の贈り物にしてもそれに従つて、ちゃんと分相応にもらつてゐる。

伊能隊長と坂部副隊長には、泡盛一壺ずつと国分の刻み煙草が二包ずつ、天文方下役と内弟子には煙草一包ずつ、侍と小者には全部で、



煙草二包という具合である。内弟子の誰かが、侍と小者を前にして、二包みの煙草をばらして、八人分に「配分」している様子を想像する

とおかしい。

また下役三人は、天文方の役人で、れっきとした武士だから、武士ではない忠敬の内弟子三人と同じ一包ずつでは、大いに不満だったにちがいない。

薩摩藩では、一行がどのよう格の人々で構成されているか、慎重に下調べをした。「垂城錄」という現地資料には、「伊能勘解由こと、下總百姓の子にて天文にて立身、いまのところ御家人とのことだが、實際は御家人より格は上とのこと、坂部貞兵衛は天文方役人で与力格の由、下河辺・青木・永井ら下役は同心格の由」とあり、麻上下など服装も含めた挨拶の仕方、贈り物の格の付け方など、藩庁より現地へ細かい指示があつたらしい。

普通小者たちは、一行の中に名を連ねてもらえない。名ばかりか、人數もはつきりしないことが多い。ただ文化八年から一年までの、二回目の九州測量のときだけは、種子島・屋久島に渡る大きな船に乗らなければならぬので、たぶん現在と同じ理由で、乗船名簿が必要だった。それで小者たちの名前が残つていて、測量隊の全容が分かるのである。

それによつて、格の降順に隊員の一覧表を書いてみる。(幕吏の場合
は、天文方へ出向以前の役職も加え、あとで出てくる人もいるので、
格に番号をふつておく)

伊能勘解由(小普請組)

小者三人付き

1 天文方手付

2 天文方手付、手伝 坂部貞兵衛(御先手同心)

小者一人付き

3 天文方手付、下役 永井甚左衛門(大御番、小笠原備後守付同心)

今泉又兵衛(御書院番同心)

門谷清次郎(御細工所同心)

各小者一人付き

4 伊能勘解由、内弟子

尾形謙一郎(この手紙の差出人)

箱田良助

保木敬藏

久保木佐右衛門

加藤嘉平次

宮野善藏

笠原三之助

6 小者

(竿取)

佐助

甚七

左兵衛

清助

友吉

新八

弥兵衛

計一九名

侍、というのは、文字通り侍る者の意で、渡り奉公の若党・中間をさし、年俸が三両一分であつたことから「三一侍」という蔑称もあるが、一応苗字を持っている。のちほどその書簡を紹介するが、この三

人のうち、忠敬付の加藤嘉平次は有能であつたらしく、測量士として、

〈筆取〉は測量の筆

（竿取）は測量の竿を持つて立っている、測量専門の人足で忠敬直である。（義）はオフリの仕活を一歩も、〔測量日記〕をま、

属である。
〔僕〕は身の回りの世話ををする下男で、「測量日記」では、「草履收」とも書かれていた。

「草履取」とも書かれている

侍と僕は、名目上御主人にのみ屬していた。坂部貞兵衛付の侍の三之助と僕の清助などは、途中で主人が亡くなってしまったので、先に帰りたいといい、路銀と手形をもらつて帰してもらつた。彼らは途中で放り出されたのではない。忠敬と江戸の天文方、高橋景保との間に一、三回文通があつて、連絡が行き届いていた。景保の忠敬宛書簡に「御文の通り姫路からお帰しの方がよいでしょう。もつとも、二人とも若年ゆえ、道中相慎み、心得違ひなく帰府するよう精々申し聞かせてください」とある。また清助は佐原の出身で、帰府してすぐ景保に、侍奉公したいと申し出たので、「当方に召抱えの約束をしまし」と忠敬へ報告の別便がある。面倒見のよいことである。

内弟子をのぞけば、忠敬の命令一下、全員がサッと動いたのではな
いようで、天文方の武士に所属しているものは、測量中も、その御主
人とセットになつて動いている。

それでも武士以外の、内弟子や小者たちは、箱田良助を除いてほとんど上・下総に關係のある人々で、マネージャーとして、みんなの面倒を見た忠敬の長女伊能妙薰（この手紙の受取人）が中心となつて、集めたらしい。留守宅の妙薰は、人集めから測量の日用雑貨の準備までこなし、隊員たちにとつては母親のような存在だつた。

測量の土台を支えたのは上総・下総の人たちで、千葉県民は、誇りにしていい。

原
文

差出人尾形謙二郎の人物評

〔釈文〕

(中略)

一、下役、内弟子、侍、小者等迄も

一統和熟仕り、口論等モ決て

無之候 先御安堵可被下候

一、保木氏モ段々手慣れ申候て、

随分御役ニ立申候 乍然、近眼ニ

困り申候 算術モ上達仕り、手

跡モ上り申候 今ハ今泉、門谷

モ余り劣り不申候 其力ワリ

厳重ニ仕込候間、少々迷惑モ

可有之候 乍然、身為ト思へ、一向

遠慮不仕候

一、嘉平次、恩ノ外ノ実義者ニ御座候

善藏モ随分親切ニ勤メ申候

佐右衛門、佐介、已御存之通りニ

御座候 甚七、清兵衛モ能

大切ニ奉公仕り候

〔口語文〕

(中略)

一、下役、内弟子、侍、小者にいたるまで、一同すつかり親しみ合い、

口論になることなど決してありません。先づご安心ください。

一、保木氏もだんだん手馴れてきて、随分お役に立っています。ただ

近眼にだけは、困っています。算術も上達し、字も上手になりました。今では、今泉や門谷にも劣らないほどです。そのかわり、私が

厳重に仕込んでおりますので、少々迷惑と思つてゐるかも知れません。しかし彼の身のためと思つて、まったく遠慮はしていません。

一、嘉平次は、思いのほか仕事が出来ます。善藏も心をこめて、勤めております。佐右衛門も竿取の佐助も、すでにご存知の通りです。

甚七、清兵衛も大切にご奉公しています。

差出人の尾形謙二郎は忠敬内弟子のひとりで、名前が何度も変わることもしない。とにかく複雑な家族関係の中で育つたらしい。実父が

当時の和算界の大物、会田算左衛門であること、香取神宮の神官、尾形平馬の次男として育てられたことの二点だけが、分かっている。

頭書の部分の続き、種子島・屋久島測量の詳報は後回しにして、隊員の人物評を妙薫に知らせている末尾の部分を引用した。

尾形氏は、自分が口をきいて集めた者は、役に立つてゐるかしらと心配の妙薫を、安心させようと懸命である。

ここに出てくる問題児らしい保木さんは、佐原村の領主、六千石の大身の旗本津田山城守の家老、渡辺一家の一員で、算術の能力もなく、悪筆で、忠敬からさんざんの悪評をこうむつてゐる人である。

この時が最初の参加で、ベテランの尾形氏に大分しごかれてゐる様子がうかがえる。内弟子同士で、鍛え合つてゐるのだ。しごきの結果、「今ハ今泉、門谷モ余り劣り不申候」と述べ、天文方下役の武士たちに对抗心を燃やしてゐることにも注目したい。

伊能家は、当時佐原村で同時進行中の訴訟に巻き込まれていた。策士でもあつた忠敬は、この件で家老に有利に動いてもらうため、渡辺

家の依頼をうけ入れ、妙薫や長男景敬の反対を押し切つて、我慢して問題児を隊員に加えたのだった。忠敬の目論見は当たつて、この我慢は、訴訟には大いに役立つた。

字も上手になり、お役に立つていて、この事情を知つていて心を痛めていた妙薫さんには、なによりのニュースだったと思う。彼は、このあとの伊豆測量にも従事し、一度御用を勤めた。（つづく）

注 熊本県立図書館の御回答によれば、『肥後国誌 下』には、「徳光

仏山水保ニ在 薩州界木アリ（略）注曰、徳光仏山ハ薩州の界、

山上ニ、石浮屠（石塔）アリ 德光仏山ト云銘文消滅、不分明（略）肥薩の堺ナレ共、境界分明ニ知ル者ナシト云フ」とある

由である。

参考文献

- 大谷亮吉 「伊能忠敬」
前田 勇 「江戸語の辞典」
司馬遼太郎 「街道をゆく—肥薩のみち」
増村 宏 「伊能忠敬の屋久島種子ヶ島測量」
佐久間達夫 「伊能忠敬 測量日記」
熊本県立図書館レファレンス回答
「高橋景保書簡」伊能忠敬記念館蔵
伊能忠敬文書目録 84

（あんどう ゆき）・元国立国会図書館、忠敬文書研究家

よみうり寸評

東京下町にある富岡八幡宮の鳥居をくぐると、方位磁石をつけた杖を手に、旅の第一歩を踏み出す男の銅像に出会う◆伊能忠敬55歳。ここで道中の無事を祈願した後に、蝦夷地へ向けて最初の測量に出た。日本地図が刻まれた背後の石碑に、旅立ちの日は200年あまり前のきょう、1800年6月11日である◆日本の精密な実測地図を作る仕事は、それから73歳で没するまで続き、弟子たちに引き継がれた。石碑の地図は北海道から九州まで収めた「伊能小図」

で、現代のものとほんと違わない◆天文や測量を本格的に学び始めたのは、家督を譲つて江戸に移り住んだ50歳の時からである。人生の山を一つ越えてから、もう一つの大きな山を見据えて、後世に残る仕事にとりかかった◆厚生労働省によると、55～69歳の就業率は男性72%、女性46%。4年前の前回調査より、わずかながら上昇した。同時に、意欲があるのに仕事に就けない人もやや増えている◆何歳になつても皆が意欲を持ち続け、社会がそれを生かせるようになつた。伊能像は力がみなぎっている。

間宮林蔵の東蝦夷地測量

一文政上呈図にその足跡を探す—

井口利夫

伊能忠敬の全国測量の契機となつた蝦夷地測量の主目的については、よく言われているように緯度一度を実測することにあつたとされ、後年の大きな目的となつた沿岸測量についてはそれほど重点は置かれていなかつたといわれている。その測量成果については伊能忠敬自身も十分納得していなかつたようで、地図の献上にあたつて自ら、天測は精密に行つてゐるから緯度の精度は十分だが距離と角度の精度は蜜とは言い難いと述べてゐるし、第二次測量の幕府への申請にあたつて、「眞の地圖とは難申上」とまで述べてゐる文面にも窺える。第二次測量の申請に際し、残る西蝦夷地の測量に合わせて東蝦夷地も再測量したかつたというのが、伊能忠敬の本心ではなかつたかと想像される。結局、周知のとおり、以後伊能忠敬が蝦夷地の測量をする機会は与えられなかつた。従つて、伊能忠敬の北海道についての測量成果は、南東岸（東蝦夷地）の厚岸湾手前（仙鳳趾）までである。残る厚岸湾以東の東蝦夷地及び西蝦夷地の測量は、伊能忠敬から測量技術を伝授された間宮林蔵によつて行われたとされている。

間宮林蔵についての保柳睦美的評価

ところが、この間宮林蔵の貢献について、保柳睦美は『伊能忠敬の科学的業績』の中でやや懷疑的な見方をしてゐる。間宮林蔵の蝦夷地測量についての文献資料が極めて限られていて、その業績についての

評価がかなり難しいにしても、この保柳睦美的説にはいささか納得できない点がある。やや長くなるが、その当該部分（古今書院版83頁）を以下に掲げる。

「ついでながら、忠敬が残した蝦夷地沿岸の空白部を補つたと説明されている間宮倫宗の測量結果（大日本沿海実測全図凡例、文政四年、による）が、経度の狂いは別として、海岸線の状況は予想外に良好であることも疑問の一つである。この測量は樺太の場合のようない方位盤だけに頼つたのではなく、忠敬から天体測量法も教えられ、象限儀も持参した。しかし倫宗は探検家であつたが、測量熟達者ではなかつた。そして最も基本である道線測量をどうやつたのか、またどれだけの人数と日数で全測量を終えたのかもわからないのである。少なくとも伊能隊員のような熟練者が集められたことや、沿道の人々からの援助が得られたことは考えられない。残される道は磁針を頼りにした単身の歩測である。そうすると、こんなに長距離がかなり正しく測れたことに疑問が生まる。だから凡例にそう書いてあつても——これは忠敬自身が書いたものではない——、他の人々の測量資料も加えての編集結果ではあるまいか。」（注 傍線井口）

以下、傍線部について、若干の私見を述べる。

①「探検家であったが、測量熟達者ではなかつた」

探検家だったことを強調することで、ことさらに測量熟達者であることを軽く見ようとする書き方は頗けない。伊能忠敬の指導を受ける以前にも、村上島之允の弟子として測量についての訓練を十分積んでいて、実績も十分あつたと考へるべきではないだろうか。

ちなみに、大谷亮吉著『伊能忠敬』（66頁）の「文化五年蝦夷松前奉行所在勤高橋三平重賢が忠敬に送りたる年始状」の中に間宮林蔵を

推薦する部分がある。傍証として引用しておきたい。

「扱貴君にも何卒近年之内御下り 地形御十分ニ御仕立 後世之鑑と仕度事ニ御座候 其節は林蔵なども貴下へ爲属 爲被相勵申度候（下略）」（注 段落スペースは井口）

②「少なくとも伊能隊員のような熟練者が集められたことや、沿道の人々からの援助が得られたことは考えられない」

初期の蝦夷地測量当時の伊能忠敬の測量体制と比較してはどうだろうか。元百姓當時浪人という身分の伊能忠敬と弟子三名（若年者も含まれる）に従者一人、それに現地の人足三人。幕府直轄後間もなく諸施設も整っていない時期。伊能忠敬の測量体制もかなり限られた内容である。一方、間宮林蔵は幕府蝦夷地奉行の幕吏で、測量時期もその10年以上後と推定されている。記録は残っていないものの、ある程度の体制は執れたものと考えるのが普通ではないだろうか。

③「忠敬自身が書いたものではない」

この保柳睦美の主張は逆のように思われる。即ち、間宮林蔵の提供した資料に対して、「辞」を贈った伊能忠敬には配慮の必要があつても、それ以外の者が冷淡であつたとしてもおかしくない。むしろ忠敬以外の者が書いたことが、その貢献を無視出来なかつた事を示していると考へるべきではないか。

ちなみに、「大日本沿海実測録」凡例は以下のようである。

〔蝦夷地方測量未完備 故今取間宮林蔵所測 以參補之〕

④「他の人々の測量資料も加えての編集結果」

これまたおかしな話で、村上島之允亡き後（文化五年八月病没）この当時の蝦夷地に、伊能忠敬の直接の指導を受けた間宮林蔵以上の測量技術をもつた者が別に居たとか、各地の沿岸測量を実施していくと考える方が、無理があるのでないだろうか。

ちなみに、「伊能忠敬江戸在住日記」（伊能忠敬研究26・31号）によれば、文化14年（1817）10月11日（測量結果を持って）帰府、伊能宅訪問、その後10月15日から12月20日の間伊能宅に在泊している。

この間、自らの測量結果と17年前の寛政の測量結果を照合して、蝦夷地圖を集大成する仕事に打ち込んでいたと思われる。

但し、伊能忠敬没後、暦局と間宮の関係は断たれたようで、間宮林蔵によってその後測量されたはずの亀田半島や知床半島の測量結果は、文政4年（1821）幕府に上呈された『大日本沿海奥地全図』（以下文政上呈図又は文政図）には採り込まれていない。

以上、文政上呈図における間宮林蔵の貢献はまず間違いないと思われる。

文政上呈図における間宮林蔵の測量部分

文政上呈図における間宮林蔵の測量部分については、大よそ冒頭に述べたように説明されてきた。しかし、もう少し細かい点にまで目を向ければ、伊能忠敬が寛政十二年（1800）上呈した東蝦夷地の絵図（以下寛政上呈図又は寛政図）内で「不測量」とし、文政上呈図で「不測量」でなくなつた部分も、当然間宮林蔵の測量成果のはずである。この点について、これまで詳しく述べられたことは無いようだが、ほとんど自明と言えることだろう。

東蝦夷地の内「不測量」とされる部分は、寛政上呈図の「添書」と「凡例」に記載がある。

「寛政上呈 添書

（略）サハラよりエサン シヲクビ等は測量不仕候 ヲシャマンベよりブンケ アブタ 又ホロイツミよりサル、ヒロウ 亦コンブムイ ゼンポウジの間 山越仕候間 右海岸測量不仕候所有

之候 乍然 圖面象形難相分候間 所々より見込候方位を以て
其海岸又は岬等圖面へ書加へ 不測の儀を相記し申候 (略)

〔伊能忠敬〕忠敬會 (二三三) 傍線及び段落スペースは井口

同書については以下同)

「凡例

(略) 即未測ノコトヲ記ス サハラ エサン シラクビ 等ノコ
トシ 「シヤマニ」ヨリ「レブンゲ アブタ モロラン ホロイ
ツミ サル、コンブムヰ ゼンボウヂ」モ亦同シ (略)
(同上 一四〇)

以上「添書」と「凡例」
ではやや違いがあり、内容
も読み取り難いが、地図写
真などを参考にして整理す
ると、仙鳳趾までの内で海
岸部「不測量」とした個所
は、以下の6ヶ所を言つて
いるようである。

①佐原く恵山く汐首岬
(亀田半島図中に「不
測量」と記載)

②長万部く礼文華

③虻田

④室蘭 (絵納半島の太
平洋岸図中に「海岸
不測量」と記載)

この間の「測量日記」(伊能忠敬)忠敬會を見ると、往路は
「同十七日 朝四ツ頃迄晴天夫より曇天 朝六ツ半頃諸蘭出立
山登 海邊へ出 又山へかゝり 峠を三ツ程越 原を行 鷺

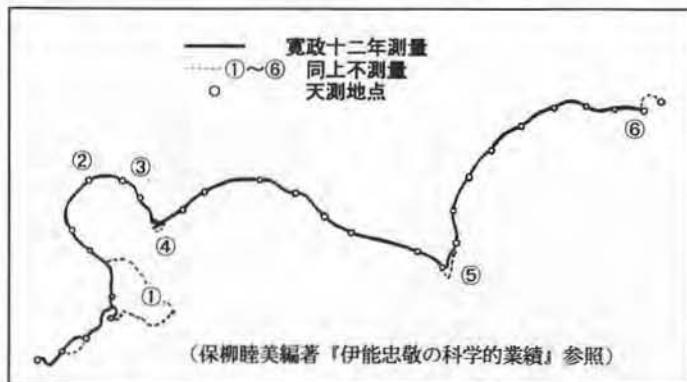


図1 寛政大図における蝦夷地「不測量」個所

⑤幌泉く沙流留く広尾 (襟裳岬及びその北東海岸一帯。エリモと
ナウセツブに「不測量」「海岸不測量」と記載)
⑥昆布森く仙鳳趾 (仙鳳趾の手前、尻羽岬の図中に「不測量」と
記載)

これらの中、文政図で不測量でなくなつたのは⑤⑥の一箇所で、亀
田半島や絵納半島の太平洋岸等は「不測量」のまま残された。

しかし、詳細に眺めると、上記以外にも幾つかの改測と思われる疑
問点が散見される。これらについては後段で再度触れることとし、先
ず、室蘭部分の測量についての大きな疑問点について述べておきたい。

室蘭測量についての疑問

(1)測量ルートについて

室蘭地方の測量については前述のように、絵納半島の太平洋岸が寛
政図・文政図共に「不測量」とされているが、以下に述べるのはこの
点ではなく、実測されている部分の両図の測量線についてのことであ
る。

寛政12年の伊能忠敬の蝦夷地測量では、往路の測量は旧暦6月17
日(西暦8月6日)で、室蘭湾北岸を西から東へ鶴別まで横断し、復
路は旧暦9月3日(西暦10月20日)、絵納半島部の室蘭湾側を会所の
あつたエトモまで測量している。従つて絵納半島の太平洋岸は上記の
ように「海岸不測量」である。

別の山中にて中食 夫より山を越 海邊へ出 五里ボロペツ
七ツ頃着 有所に止宿（略）（注 有は他書では會）
とある。當時モロラン（現在の崎守町）にはまだ会所は無かつた。この夜、幌別で天測を行い、幌別には二泊している。

帰路は、9月で

「同三日朝より曇天四ツ頃より小雨其後曇天 朝五ツ前母衣別
出立 鶩別にて小休（エトモ迄三里十二丁半） 道法五里
八ツ過エトモへ着 會所に止宿（略）
絵納からは、船で佐原まで渡る予定だつたらしいが、順風に恵まれず、二日間滞留した後、五日対岸のモロランまで船で渡り、噴火湾沿いに陸行して佐原に向かつた。絵納では「四日午中太陽を測る」とある。

ベケリウタ

（略）ゴロタ濱少シ行 夫ヨリ先大ゴロタ處々ワシリ有 浪有ル節ハ通行ナラス ワシヘツ江ノ山道有リ

（略）此邊ヨリ内海也

是ヨリ海岸高岩ツ、キニテ汐立ノ節通行成難シ 山越道有リ

（注 崖岬を乗越す巻き道か）

ホロモエ 大ゴロタ濱 此所ヨリ又山江上リ（注 ホロモイ岬を越えホンナイ川口へ出る山越え道か） 木立原道行キ濱江出ル

ワノシ （略）

此所濱ゴロタ 此所ヨリ山越少シノ道有（注 崖岬ワニシノツを越える道か） 木立原小澤江下リ

チリヘツ （略）砂濱道行ク ヒラ切立 山近ク木有リ 夫ヨリ

往路の測量日記については、記述の状況が海岸沿いの測量記録としてはやや判り難いところがあり、また既刊の文政中図では、測量線が海岸からどのくらい離れた位置を通つているのかがはつきりしない。

当時の海岸線は崖になつてゐる部分などが多く、通行にはかなりの支障があつたようだ。寛政九年（1797）高橋壯四郎等の著した『蝦夷巡覧筆記』に、伊能測量の直前の状況を示す記録がある。海岸線に沿つて、所々崖上にバイパスしながら湾岸沿いに絵納半島先端までの行程が記載されている。室蘭湾北岸沿いの状況を抜粋すると、

「モロラン 番小屋有リ

此所山近ク木有リ 當所ヨリ エトモ江舟渡シ 當處ヨリゴロタ濱 少シ行キヨリ先ハ 海岸处々ワシリ有リ 浪有ル節ハ通行ナラス ペケリウタ江山越工道有リ 山道半里余木立原難所行キ 小沢江下リ 夫ヨリ

イトチケレフ

此所岩崎 海ヨリ切立通行成難シ 沖ニ岩小島有（略） 此地ツ、キ外海見ユル 此所ヨリ外海ノ方イタンキヘ出ル道規一里余 大谷地道 此平地一里四方位一軸ノ谷地野也 富所内海ユエ汐干潟一丁程（略） 砂濱行キ

以下、室蘭湾の南岸沿いにエトモまでの険しい道筋の記述が続く。

これから見るとおり、湾内沿いも何とか通行ルートは確保されていたことが判る。ただ、これが「測量日記」の表現するところと一致しているかと言えば、やや落ち着きの悪いところがあつた。

2004年夏、アメリカ大図の里帰り展で大図の測量線を確認する
と、中図のイメージとは違つて、かなり忠実に海岸線に沿つて引かれ
ており、大きなバイパスや「岬を三つ程越え」という「測量日記」に
記述のあるルートとはかなり印象が違う。改めて『伊能忠敬と日本図』
(東博)で寛政大図を確かめると、どうも測線の様子が文政大図とは
異なつていて、室蘭の測量について、伊能忠敬は上記の
ように往復のルートを異にしているから、この間に二種類の測量デ
タがある筈
ではなく、若
し両図の測
線が異なつ
てているとす
れば、文政
図の室蘭部
分の測量結
果は伊能忠
敬によるも
のでは無い、
つまり間宮
林蔵の測量
成果である
ということ
になつてしま
う。



図2 寛政大図の室蘭部分

寛政・文政両図の測量線の相違を確認するために、東博及び国立公文書館の寛政大図の实物写真(図2)を取り寄せて詳しく検討したところ、明らかに両図の測量ルートは異なつていて、両図から当時の測

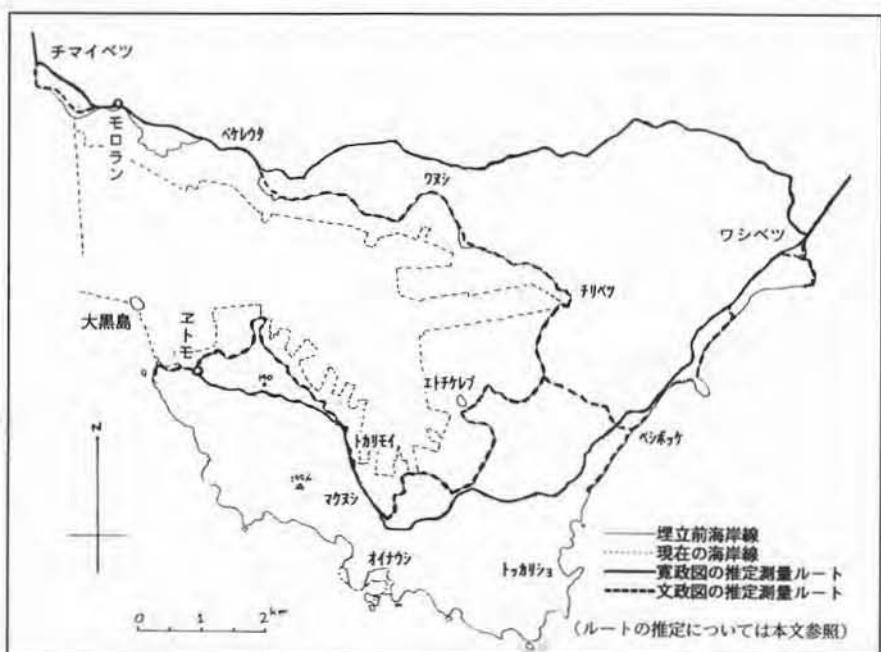


図3 寛政・文政大図の室蘭測量の推定ルート

量時のルートを推定し、当時の海岸線の残っている明治29年陸測仮製五万分図などを参考に地形図の上に落としてみたのが、図3である。絵納半島部については、両図とも測量誤差が著しいので、古地形や旧道の記録などを勘案しながら測量ルートを推定してある。

大略して言えば、寛政図は室蘭湾の北岸・南岸ともに内陸の旧道を利用しているらしく、一方、文政図の方は海岸線を忠実にたどるよう測量ルートを選んでいるらしい。

明らかに、文政図の室蘭の測量線は伊能忠敬による寛政図のものではなく、間宮林蔵によつて改測された結果に基づいていると言つてよいと思われる。

② 絵納半島部の測量の誤差について

「伊能間宮図」についてはその正確なことがよく言われているところだが、こと室蘭の絵納半島の部分に関する限り前述のように信じられない程の大きな誤差がある。図4・5にその状況を示した。現行地形図と合わせる基点として、室蘭の西境チマイベツ川口、又は東境ワシベツ川口（いづれもそれ以遠は長い海浜が続き、測量誤差が少なかつたと思われる）の2点を押さえ、それを地形図の上に落として比較してみた。寛政図では東西方向がやや短く、絵納半島先端部ではエトモまでが更に短くなっている。文政図ではこの距離の不足は無くなつてゐるが、湾の最南端部に岬が一つ余分に描かれているのが判る。

寛政図のエトモの位置のズレは約1kmもある。図3に示したエトモ附近の測量推定ルートは、エトモの位置から逆にたどつて推定しているが、図4の点線部分がエトモの位置を基点として落とした場合を示している。エトモの位置が大きく外れていることは、エトモから目と鼻の先にある大黒島との位置関係で直ぐに気付くはずである（対岸の

モロランと大黒島の関係はほぼ正しい）。厚岸以東の測量できなかつた地形については、交会法等により大略遜色のない絵図を描き残している。それと比べて何故こんな誤りが残つたのかは不思議である。

文政図では、モロランとの関係からはエトモの位置は合つているのだが、湾の南の最奥部に岬が一つ余分に描かれている。この岬の附近に書かれた4つの地名の位置や描き込まれた沼や分岐測線の位置が、

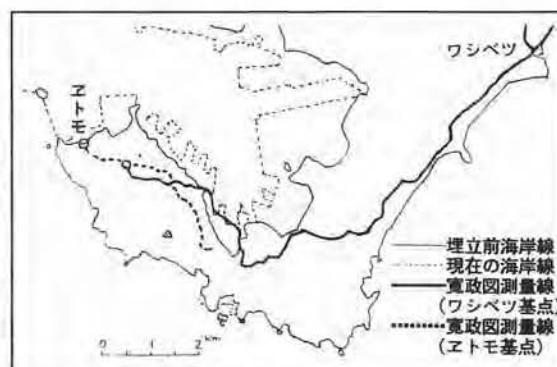


図4 寛政大図の室蘭絵納半島部

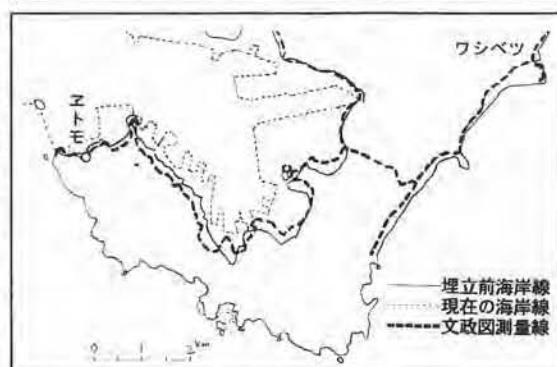


図5 文政大図の室蘭絵納半島部

他の史料と比較すると混乱していることが判る。この誤りについて、大胆な想像をすれば次のようなことも考えられる。例えば、この部分の測量データに不整合でもあつて、その処理方法として、ワシベツの

方から途中まで図化する一方、エトモの位置を交会法などで確定してこちらの方からも図化をすすめ、中間の測量データの混乱した部分を岬一つ分に整理したのではないか、という想像である。この部分の地名・描写の位置関係を解きほぐすことで、この過誤を起こした原因を更に尤もしく推定できるかもしない。

(3) 地名記載数についての疑問

また地名について言えば、他の地方も含めて寛政大図と文政大図とでは地名の記載数に著しい違いがある（本稿では省略するが、小地形の描写や川口の位置についても同じことが言える）。室蘭地方では、寛

政大図の地名はわずか5つだが、文政大図では24に増えている（伊能忠敬研究40号の拙文参照）。寛政大図の「自クスリ至アツケシ」では、仙鳳趾までの測量範囲に5つ、未測量範囲に9つあるが、文政大図の仙鳳趾までの間には16の地名がある。噴火湾沿いの寛政大図「自ヤマコシナイ至アブタ」の11に対し、文政大図の同じ範囲の地名は50もある。いずれも大幅に増えている。

小図の地名位置は若干アバウトでも記載可能だが、大図の場合は地名に測量データが伴つていないと、正確な位置への地名の書き込みは難しいはずである。

この地名数の差について考えられることは、(a) 寛政図の段階で採録した地名を記載しなかつただけなのか、あるいは(b) 文政図の地名が間宮林蔵によつてもたらされた情報によるものなのか、である。若し後者(b)であつたりすると、文政図は東蝦夷地もほとんど總て間宮林蔵の測量成果によつて改められている可能性が出てくる。従来の定説をゆるがせることになりかねない。

ただ、前者(a)の可能性を示す一つの手掛かりも寛政図の室蘭の地名に残されている。『伊能忠敬の科学的業績』（51頁）に掲載された、寛政小図（伊能忠敬記念館蔵、図省略）の室蘭部分に「トカラシヨ」という地名が見えることである。これは太平洋岸の海蝕崖の中の小浜で、奇岩の目立つ地帯のアイヌ語地名「トッカリシヨ」に違いない。寛政・文政大図のいずれの測量線も達していない地点である。伊能忠敬は山道にかかる前に遠望したのか、山中で分かれ道の行く先として記録したのか、であろう。この地名は、文政大図を含めて他の伊能間宮図には無い。

その他の地方の両図の比較

寛政図の中で海岸線を大きくバイパス測量している個所は、先に述べた寛政図の添書・凡例で「不測量」とされた個所以外にも散見される。これらの個所を加えて先のリストを補完すると、次のようになる。

①佐原ム 惠山ム 汐首岬ム（亀田半島全体）

②長万部ム 礼文華ム（シツカリム レブンゲの間「海岸不測量」と記載）

（礼文華ム 虻田の間で、レブンゲム オブケシ、ベンベツ（文政図はベム ツ）ム フレナイ、アブタム ウスの3ヶ所の山越えがあるが、いつも「不測量」の記載なし）

（図中太平洋岸に「海岸不測量」と記載。他に既述のように、モロランム ワシベツの間の山越えは「不測量」の記載なし）

④室蘭

（幌泉ム 沙流留ム 広尾ム（襟裳岬及びその北東海岸一帯。図中エリモとナウセツブに「不測量」「海岸不測量」と記載）

記載。広尾までの東側海岸部までの山越は「不測量」の記載なし)

⑥昆布森・仙鳳趾（コンフモイ・トマチヒ子ツフの間の山越えは「不測量」の記載なし。図中ショントキ・仙

鳳趾間の尻羽岬に「不測量」と記載）

これらの個所の内、不測量のまま残された個所についても、ほとんどすべての個所で海岸線の測線が先へ延ばされており、間宮林蔵の改測の成果が織り込まれているように思われる。

寛政大図と文政大図を細かく見比べてゆくと、これ以外の部分にも両図の測線にはかなりの違いが認められるが、各地域の詳細については、紙面が限られているため機会を改めて述べることとしたい。ただ、若し両図の測線に相違があつたとしても、それだけでは文政図Ⅱ・間宮林蔵ということはできない。室蘭を除いて、寛政測量には往復路それぞれ別の測量データがあつた可能性を否定しきれないからである。

両者の野帳が失われた今となつては、この疑問を解くことは難しそうだ。ただ、両図を比較しての心証としては、前述の地名や細部の描写についての疑問もあり、文政上呈図の東蝦夷地のかなりの部分が間宮林蔵の改測による結果であるように思われてならない。

あとがき

伊能間宮図に興味をもちはじめてから未だ日の浅い者が、このようなことを書いても良いのかという迷いはあった。しかし、北方図研究に造詣の深い当会会員でアイヌ語地名研究会会員でもある高木崇世芝氏から励まされて、諸賢の御批判を覺悟の上で文をまとめてみることにした。先輩諸賢の忌憚のない御批判、御教示をお願い致したい。

またこの調査に当たつて、高木崇世芝氏より伊能間宮図のアイヌ語地名について数々の御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

（スペースの都合で省略したが、文政大図の室蘭地方の図については「伊能忠敬研究40号」の筆者拙文を参照されたい）

（いぐち としお・室蘭地方史、アイヌ語地名、松浦武四郎研究家）

【参考文献等】

- 『蝦夷地図（大図）』 七鋪 東京国立博物館蔵
 『松前距蝦夷行程測量分図』 十軸 国立公文書館蔵
 『文政上呈伊能間宮大図模写図（仮）』 米国議会図書館蔵
 『伊能図里帰り展I』 2001 伊能忠敬記念館
 『伊能圖』 2002 武揚堂
 『伊能忠敬と日本図』 2003 東京国立博物館蔵
 『アメリカにあつた伊能大図とフランスの伊能中図』 2004
 『伊能忠敬附遺著測量日誌』 明治44年 忠敬會
 『伊能忠敬』 大谷亮吉 大正6（1917）初 1979名著刊行会
 『伊能忠敬の科学的業績』 保柳睦美編著 1974初 1997古今書院
 『日本北辺の探検と地図の歴史』 秋月俊幸 1999 北大図書出版会
 『伊能忠敬研究』 第26・31号 伊能忠敬研究会
 『伊能忠敬の江戸在住日記』（六・一〇） 佐久間達夫
 『間宮林蔵』 洞富雄 平成8（1996）新装版第三刷 吉川弘文館
 『北海道の文化67』 1995 北海道文化財保護協会
 『蝦夷丸作製の蝦夷地図』 高木崇世芝
 『秦檍丸作製の蝦夷地図』 高木崇世芝
 『蝦夷巡覧筆記』 高橋壮四郎等著 寛政9（1797）内閣文庫蔵
 『五万分一その他旧版地形図』 参謀本部陸地測量部・国土地理院

伊能妙薰宛 箱田園右衛門からの依頼状

B-159

伊藤栄子

「解説文」

一筆啓上仕候 先以、追日

暖氣ニ押移り候處、益、御婚マニ（機）嫌克ヨク

可被遊御座と奉恐賀候 次ニ当方

無異ニ罷在候間、乍恐御休意可被下候

左太夫儀、長々御世話ニ被成下、難有

仕合奉存候 此上万事宜敷奉願上候

猶又、養子先へ罷越候節、持參金

等不足ニテ、指支申候様之儀も御坐候

節は、何卒御立替被下候様奉頼上候

早速此方より御返済可申候 此段一偏ニ

御頼奉申上候 誠に是迄逆も

御厚恩之程、此元ニテ一統難有

奉存上候 乍此上、万端宜敷様

奉頼上候 先は、以愚札申上度、

如斯ニ御座候 恐惶謹言

一筆啓上仕候の處
暖氣ニ押移り候處、益、御婚マニ（機）嫌克ヨク
可被遊御座と奉恐賀候 次ニ当方
無異ニ罷在候間、乍恐御休意可被下候
左太夫儀、長々御世話ニ被成下、難有
仕合奉存候 此上万事宜敷奉願上候
猶又、養子先へ罷越候節、持參金
等不足ニテ、指支申候様之儀も御坐候
節は、何卒御立替被下候様奉頼上候
早速此方より御返済可申候 此段一偏ニ
御頼奉申上候 誠に是迄逆も
御厚恩之程、此元ニテ一統難有
奉存上候 乍此上、万端宜敷様
奉頼上候 先は、以愚札申上度、
如斯ニ御座候 恐惶謹言

二月十日

箱田園右衛門

伊能妙薰様

迫て三郎右衛門様ニも御上様より結構
被蒙仰候由、此元ニても奉恐悦候
御序刻、乍憚、宜敷御祝詞被仰上
可被下候、早速、愚書可差上申処ニ、
左太夫方より之、去二日出之書状、何れニて
滞候哉、当二月八日到着仕、右ニ付、
延引之段、御用捨可被下候 以上

伊能妙薰様
手
萬年

おりましたのか、当二月八日に到着いたしました。
遅れたことを御許してください。以上

一筆御便り申し上げます。まず以つて日毎に

暖気に移り、ますます御機嫌よく

御過ごしとの事、御祝い申し上げます。さて、私共も

無事に生活しておりますから、御安心ください。また、

左太夫も、長々御世話様になり、有難うございます。

此上とも万事宣しく御願い申し上げます。

尚また、養子先へ行く様になつた時、持参金など

不足になつて、困る様なことがありますたら、

何卒、御立替を頂きたく、御願い申し上げます。

その時は、早速私方で返済を致します。この事のみ

ひとえに御頼み申し上げます。誠に是迄についても、

御厚恩の程、私共一同感謝致しておりますが、

この上ながら、万事宣しく御頼み申し上げます。

とりあえず、手紙にて御願い申し上げました。

恐惶謹言

二月十日

箱田園右衛門

伊能妙薰様

追つて、三郎右衛門様にも、公方様より御誉めに

与つたとのこと、私共も御悦び申し上げます。

お序での時に、御祝い申し上げた事を御伝えください。

早速に御手紙を差し上げようと思いました処に、

左太夫からの去る二日*出の書状、何處で滞つて

箱田家と良助の生い立ち

箱田園右衛門は、備後国安那郡箱田村（今の広島県深安郡神辺町）

の庄屋（近畿より西国では名主のことを庄屋という）であった。箱田

村は福山藩に属していた。箱田家の本姓は細川というが、この時代、

村名や地名を姓のようを使うことは珍しくはない。飛脚便などには、

分りやすいらしい。園右衛門の妻は元阿部伊勢守の家来、浦部兵十郎

の娘というから、武家育ちとみえる。この父母の次男として良助は、

寛政二年（一七九〇）に生まれた。若年は真与といつた。後年、左太

夫、園兵衛武規と名乗り榎本家を継ぐ。幼い頃より秀才の聞こえがあ

つて、勉学を好み、江戸に出て学ぶことを熱望していた。たまたま、

それを聞いていた土地の奉行が、参勤交替の出府に当たり、両親の許

しを得て良助をつれ江戸に登つた。ここまででは、ほぼ通説である。し

かし地元の史家によると、実は兄の忠太と良助の二名が江戸へ向つた

といわれる。箱田家には男子一人の子供しかいなかつた。二人とも向

学心に燃えていたようである。ところが、ある時から兄の消息が途絶

えてしまい、兄の手紙も殆ど残っていないので、土地の人は病死した

らしいという。これにより箱田家は、良助の従兄弟すじの人を跡取り

にして、名主役を継がせた。それにしても二人の男子を、わが子を信

じて同時に旅立たせた園右衛門の決断は、並の人にはできない。文化の初年、江戸に出た良助が十七才の時であった。

旗本の株を買う

良助の育った土地の近くには、菅茶山（一七四八～一八二七）といふ儒学者の出身地があった。神辺というから、箱田村の今地名となる。茶山は通称太仲、若くして京都に遊学し、帰郷後、自家の近くに塾を建て、近隣の子弟に漢学を教えた。茶山はもとより詩をたしなみ、詩名はよく知られていた。しかし、福山侯は初めその名を知らず、後で聞いて大いに驚き、召して俸禄を与えて藩の儒員とした。

良助の住居の近くからは、この茶山の教えを受けた者も多く、近辺の名主家の子弟は、皆、茶山の塾に通つたという。良助はすでに江戸へ出るまでに、漢学をたしなんでいた。

文化の年号が変わる前後より、日本を開む情勢は変わりつつあった。すでに北方からはロシヤの脅威が迫つており、北辺警備の問題が急務となつていていた。その為めには北方の地の探検や測量は不可欠であった。伊能忠敬は、寛政十二年（一八〇〇）奥州街道を北に進み、箱館から鉄路、更に根室の先の西別まで測量している。その前にも、最上徳内、林子平、近藤重蔵、間宮林藏らによつて、北辺の事情は少しづつ明らかになつていつたが、間もなく間宮林藏は、測量術を学ぶ為めに忠敬の弟子となる。こうした時流を若い良助が察知しないわけではなく、彼も伊能忠敬の内弟子となつて、数学や天文曆法を学ぶことになる。

文化六年第七次の九州測量に、良助は内弟子として初めて加わつた。これ以後、第八次、第九次、第十次の御府内測量の第一回まで測量に従い、忠敬の死後も、文政四年の奥地全図の完成まで尽力している。大体、内弟子という者は、四六時中、師と向き合つているようなもので、まして氣むずかしい忠敬は、実子や弟子にも中々及第点をつけなかつた。しかし、良助の評価は高く、信頼は厚かつたという。

この書状の追書きを見ると、將軍より御晉めに与つたという一行がある。忠敬は文政元年に他界したが、事情があつて死は伏せられていた。その後、死が公表された時、幕府は忠敬の功を称え、孫の忠晦に五人扶持と江戸に屋敷が与えられ、永代帶刀を許した。この事が追書きの一文に当たる。これが文政四年であった。良助が何時ごろ榎本家に入つたかについては、二説ある。榎本家の家系図には、文政元年となつてゐるという。一般には、文政五年ころとされる。文政元年というのは、榎本家の当主が亡くなつた年で、旗本の家として相続人が無ければ、御役は取り上げられてしまう。そこで上記の元年としたのであろう。当時の武家の風潮は、自家の株を売つてでも、庶民から有能な人物を養子にし、財政的にも困難を切りぬけて、家運の挽回をはかれる家が多かつた。一方、武士の株を買うには、まとまつた金がかかる。今回の良助の場合、これにも諸説あつて、ある本では千両、また五百両などといわれている。箱田家は商人でもなく、事業家でもない。箱田村は、元禄十三年（一七〇〇）の御検地水帳（広島大学蔵）によれば二七六石余で、石高としては小村である。

又、備後といえ、畠表の生産で名高いが、これは幕府の方針により、この近くでは指定された村だけが、江戸城御用達として、生産を許されていた。従つてこうした生産に携わることもなかつた。しかし、良助の手紙の中に、忠敬の意志で、備後表を注文した内容の一紙がある。生産者への仲介を依頼したのであろうか。ともかく、小村の庄屋では数百両は無理であろうと、地元の史家はいう。

当時、幕府の役職は時に売買されていて、例えは高額な位として、検校（けんぎょう）の株は千両といわれた。勝海舟の祖父は盲人であ

つたが、越後から江戸へ出てきて小金を蓄え、それを元手に金融業をはじめて財を成した。それを一般に座頭金と呼んでいるが、彼はこれで検校の位を手に入れた。別に学問に優れ、また楽器の名手であつたわけでもない。しかし、財政的手腕は優れていて、子孫には皆夫々士分を買ひ与えたという。検校の株千両は高額な方であつて、旗本の場合は人員も多く、石高や立場により金額は千差万別であろう。

今回の書状は、その時のことの心配して、養子先への持参金等の不足の場合は、是非とも立替えを御願いしますと依頼をしている。園右衛門の親心が伝わってくる。箱田家から、榎本家に支払つた額は具体的に記されていないが、幕末になつて、こうした例は次第に多くなつていつた。

—以下次号—

(いとう えいこ・古文書研究家)

「武揚堂」社名、社印の由来

小島 久武

当社名の由来は、創業者小島棟吉が明治三十年に軍用図書（兵隊が使用する教科書）の出版を起業したことから、武を揚げるとの意図がありました。榎本武揚存命中の事から、名前を使用するのにあいさつをして、心良く了承されたそうです。本来「武」の字は戈を止の平和の意味があつて、平和を揚げるものと聞かされました。

第二次大戦後GHQに指示され「ぶよお堂」に改名された後、昭和



1897

創業百周年を経た日本一の
地図老舗。明日に向って新し
さへ絶えず挑戦している。

三十年を過ぎて「武揚堂」を復活致しました。現代かな遣いでは「ぶよう堂」になるのですが戦後まもなくは、「お」でも「う」でも許されたので字形の良い「お」にしたそうです。
社章は、当初が○に武で武、戦前は陸軍の山形に類似して○に山の△にしましたが、戦後は△・三角点、○・日本、△・は日本の中心日本橋を合せて今のマークとしました。○は愛・・は智、△は力を表わし、円満だけでなく打破する求心力も示しています。

伊能図は国際地図学会の三十周年、四十周年の節目に近代地図のルーツとして、大先輩の偉業を残したいと取り組みました。中図一枚の時は文字が読めずに燃焼できませんでしたので、伊能図では原寸復刻を達成でき満足しました。

しかし、英國中図や新たな発見が相次ぎ、次の発行意欲が出来てあります。伊能中図は原寸、全編が一冊になつてある貴重な資料ですが、まだ普及が不充分で残念です。もっと多くの人に伊能図を見てもらい、研究成果や地図愛好家が出現するのが楽しみです。

(こじま ひさたけ・武揚堂社長)

伊能忠敬と間宮林藏

師弟の絆が蝦夷地の地図完成（二）

佐久間 達夫

七、間宮林藏の蝦夷地測量図

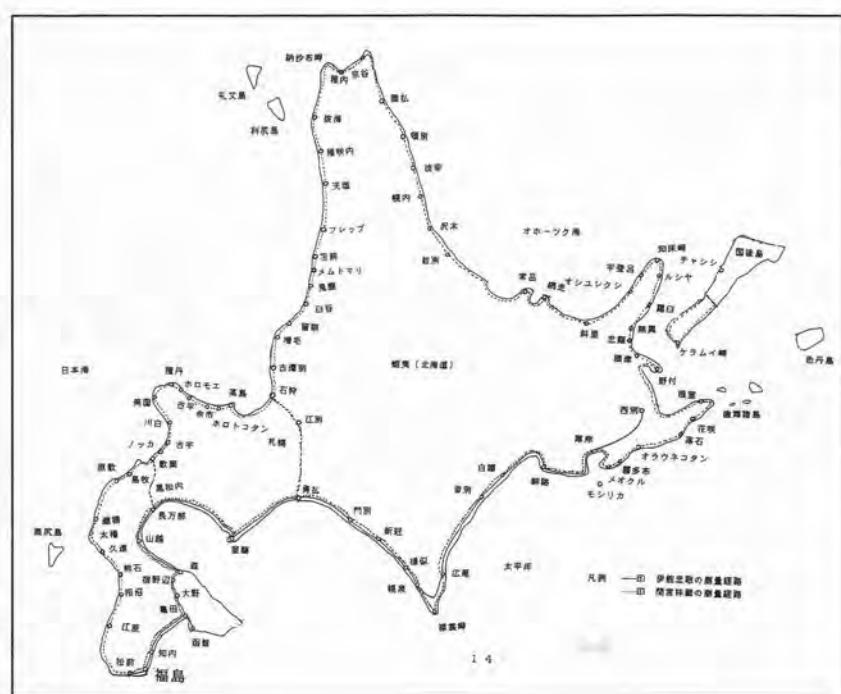
間宮林藏の蝦夷地測量の内容を、伊能忠敬記念館で所蔵している蝦夷沿海地図の下絵図と伊能忠敬や間宮林藏の書簡等から推察してみると、林藏は、文化十年から三年程の年月をかけて蝦夷地の沿岸全部と、内陸部の長万部から歌棄迄と勇払から石狩迄とを測量したようである。

伊能忠敬記念館には、第七次測量から第十次測量迄に実測した箇所の下絵図は全部といつていよい程保管されているが、第一次測量から第六次測量迄のものは数える程しかない。これは文化十年二月二三日に浅草にあつた暦局が火災にあい、その時、下絵図も焼けてしまつたことが考えられる。

従つて記念館で保管している「蝦夷の下絵図」は、林藏が実測した資料をもとにして作製したものといえる。そのことを裏づけるものとして、蝦夷南海岸は、忠敬と林藏の両隊が測量したのであるが、伊能図に記されていない地名や川の名等が間宮図には記入されてゐる。

間宮図には三種類の下絵図がある。一つは、測量の野帳を基にして小区域の測量地を地図にしたものである。二つ目は、前記の地図を寄せ合わせて幅三尺（九〇cm）長さ六尺（一八〇cm）程の大きさ

蝦夷地全図



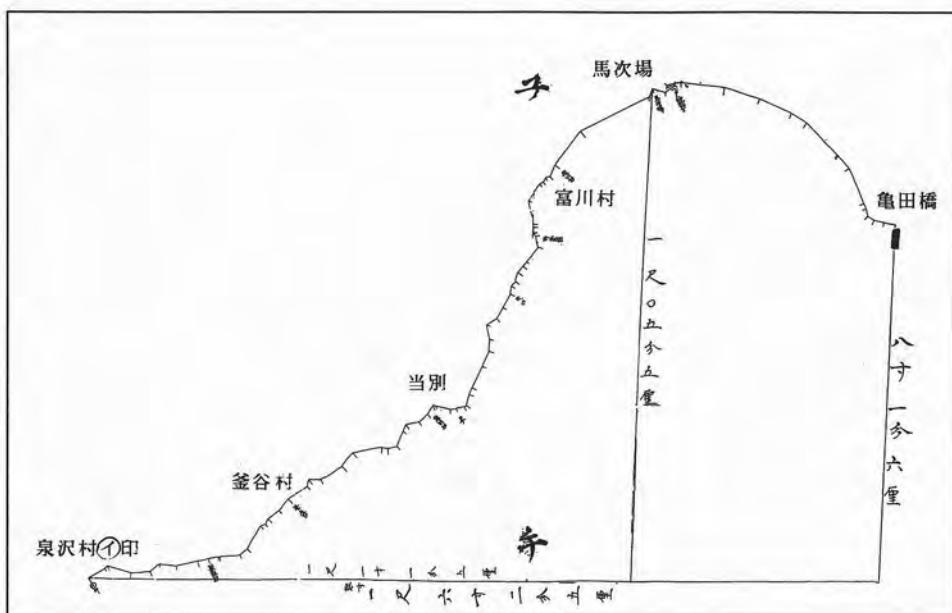
筆者作成

にしたものである。これが大図の原本で「寄せ絵図」あるいは、「突

手本」ともいっている。縮尺は三万六千分の一である。三つ目は、寄せ絵図を何枚か集めて一定の大きさに縮小して作成した地図で、これが縮尺二十一万六千分の一の中図である。この中図の測線は、朱色で書かれていて、五葉で蝦夷沿岸と国後島があらわされている。また、この中図の裏には「一里六分之図」と記されている。次にこれらの地図を詳しく記してみよう。

資料一一 間宮林藏測量小区域図（大図）

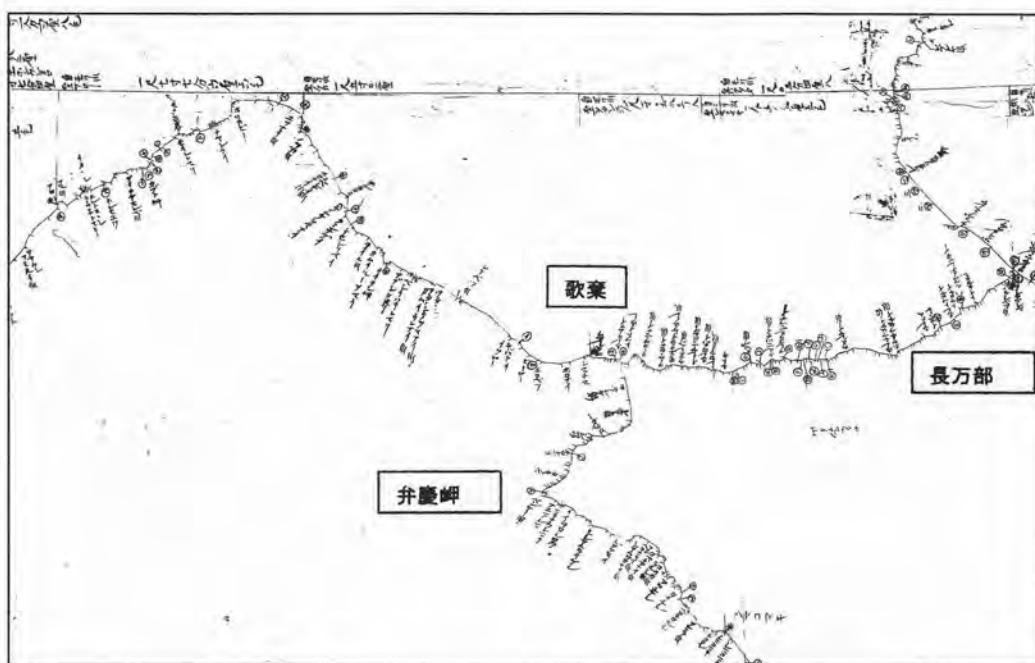
- 1 箱館亀田橋より茂辺地村、泉沢村①印迄
- 2 泉沢村①印より木古内、知内迄
- 3 松前より赤神、オコナイ②印よりアイトマリ、石崎、木野子村、ヨシカサワ
- 4 オコナイ②印よりアイトマリ、石崎、木野子村、ヨシカサワ
- 5 ヨシカサワ四印より江差、トノマ迄
- 6 トノマより厚沢部、乙部村、小茂内、カキカケ迄
- 7 鶴川より沙流川迄
- 8 沙流川より門別、幌内、ウタシャブ迄
- 9 ウタシャブより無谷辺、新冠、静内迄
- 10 静内より門別、ホロフ、モッペ、ケレマブ川迄
- 11 ケレマブ川よりイカンライ、浦河④印迄
- 12 国後島
 - ・クナシリよりト一沼迄
 - ・シレムイよりフニ崎迄
 - ・フニ崎よりチヤシシ迄
 - ・シレムイよりノテト迄
 - ・ノテトよりケラムイ迄



蝦夷地小区域図 自箱館亀田橋 至泉沢村①印 (伊能忠敬記念館蔵)

資料一二 間宮林蔵測量寄せ絵図（大図）

- 1 弁天（現松前町）より松前、荒谷、白神岬、吉岡、福島、岩部岬、重内、木古内迄
- 2 木古内より泉沢、当別、富川、亀田、箱館、尻沢部迄
- 3 箱館より千代田、大野村、市ノ渡、峠下、茅部岬、追分、鶴木、落部迄
- 4 ノマジリ川より遊楽部川、国縫、長万部、歌棄迄
- 5 ヌスキベツ川より虻田、長流エントモ、室蘭、鷺別迄
- 6 鶴川より沙流川、新冠、静内、鳧舞迄
- 7 様似より幌泉、襟裳岬、庶野、猿留迄
- 8 ホントモチクシより音調津川、広尾、音別、モコトウチカボヤニ迄
- 9 オビネップ川より落合、花咲、イヌヌウシ川、内陸部を経て根室迄
- 10 ハタラより温根沼、風蓮湖、西別、タムカ、春別川、トボロ川、セツノシタ迄
- 11 小向より紋別、沙留、沢木、雄武川、幌内川、音標、乙忠部、枝幸、神威岬、斜内、頓別川、猿払川、本枝幸部、鬼志別川迄
- 12 鬼志別川よりトマリオロ川、シルシユツ岬、宗谷、クチヤブツ川迄
- 13 クチヤブツ川よりウエンノツ岬、野寒布岬、カムイトウ、抜海、稚咲内、サルル、天塩、モウツ川、ウエツ川、シユサンベツ川、シエルソマナイ、苦前、メムトマリ、オニシカ、ウーシヤ、ルルモツベ川、オピラ、アフニ、本増毛迄
- 14 ハシベツ川よりブエマシリ、増毛、グーレン、別荘迄



間宮林蔵測量・長万部、歌棄付近下絵図（伊能忠敬記念館蔵）方角は左が北

ベシイワキより古澤別川、石狩川、小樽迄

16 15 小樽より高島、ノテト、塩谷、フンコンベ岬、下余市、古平

川、美國、ラオツベ迄

17 国後島

・ノテト崎よりモシリノシケ、ケムライ崎、トーフツ迄
・イソヤマベツよりフーニ、チャシシ、トカルンワタラ迄。
・ノテト崎よりシレムイ、トーバロ、ケラムイ崎迄。

資料一三 間宮林蔵測量一里六分之図（中図）

括弧内は、間宮林蔵測量下絵図の地名

1

松前（マツマエ）より白神岬（シラカミ）、吉岡（ヨシオカ）、

福島（フクシマ）、知内（シリウチ）、泉沢（イズミサワ）、箱館

（ハコダテ）、大野（オオノ）、市渡（イチノワタリ）、茅部岬（カ
ヤベ）、宿野辺（シユクノツペ）、追分（オイワケ）迄

2 森（モリ）より落部（オトシベ）、野田追川（ノタオイ）、山越

（ヤムクシナイ）、遊楽部川（ユウラツフ）、国縫（クンヌイ）、

長万部（オシャマシベ）、静狩川（シツカリ）、札文華川（レブ
ンケ）、虻田（アブタ）、有珠（ウス）、長流別川（オサルベツ）、

室蘭（モロラン）、ホロベケレオタ川迄

・長万部よりオハルシベツ川、トイタコタン、ホントツタナイ、

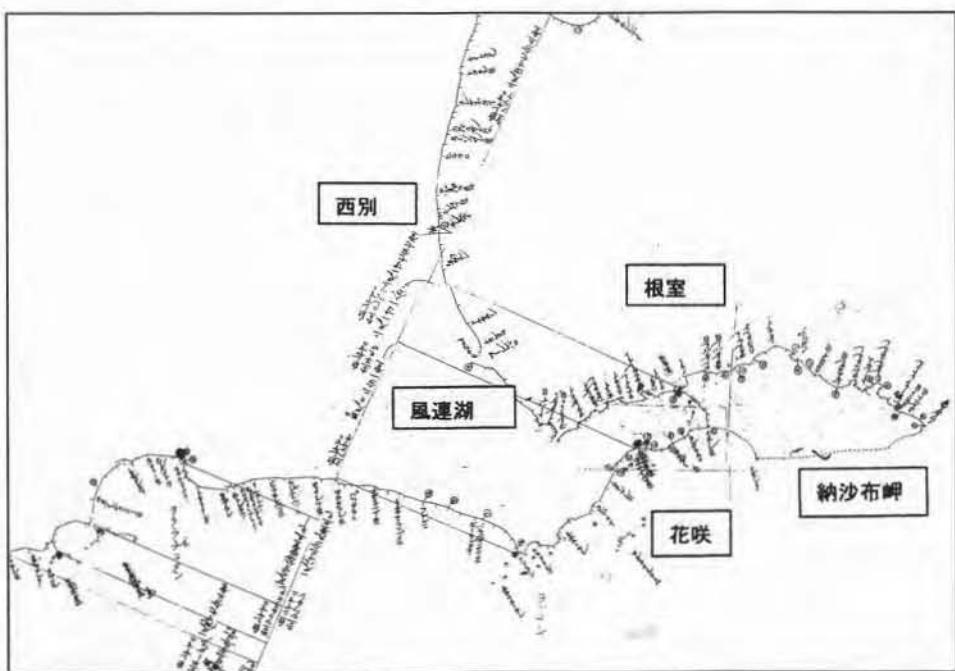
イヌヌシ、ウタシヤイ川、チトキ、歌葉（オタシユツ）迄

・相沼内（アイオマナイ）より熊石（クマウシ）、久遠（クドオ）、

太橹（フトロ）、瀬棚（セタナイ）、島歌（シモオタ）、弁慶岬

（ベンケイ）、寿都（シツツ）、尻別川（シリベツ）、雷電岬（ラ
イテン）、野狐（ノツカ）、古宇（フロウ）、川白（カワシラ）、

神威岬（カムイ）、積丹（シヤコタン）、美國（ビクニ）、余市



間宮林蔵測量 根室、花咲付近下絵図（伊能忠敬記念館蔵）

(ヨイチ)、忍路(ウショロ)、高島(タカシマ)、古潭別川(コタンベツ)、ベシイワキ迄

3 様似(シャマニ)より幌泉(ホロイズミ)、襟裳岬(エリモ)、

庶野(ショウヤ)、広尾(ビロウ)、白糠(シラヌカ)、庶路川(シヨロ)、大楽毛川(オタノシケ)、釧路(クスリ)、昆布森(コンブミ)、尻羽岬(シリハ)、厚岸(アツケシ)、霧多布(キイタツブ)、落合(オツチシ)、花咲川(ハナサキ)、納沙布岬(ノツシマム)、根室(ネモロ)、温根沼川(オンネトウ)、風蓮湖(ウレンバロ)、根室(ネモロ)、温根沼川(オンネトウ)、風蓮湖(ウレンバロ)、西別(ニシベツ)、春別川(シユンベツ)、野付(ノツケ)、忠類川(チユウルイ)、薰別川(クンシベツ)、羅臼川(ラウシ)、ルシャ川、オショロコツ迄

4 帆別川よりウカオブ、斜里川(シャリ)、濤沸(トウブツ)、藻琴川(モコト)、網走川(アバシリ)、能取岬(ノトロ)、常呂川(トコロ)、湧別川(ユウベツ)、小向川(コムケ)、紋別(モンベツ)、沙留(サルル)、沢木(サワキ)、枝幸(エサシ)、斜内(ショナイ)、頓別(トンベツ)、シルシユツ岬、宗谷(ソウヤ)、野寒布岬(ノツシヤム)、稚咲内(ワツカシヤクナイ)、天塩(テセウ)、苦前(トママエ)、留萌(ルルモツ)、セモシユツ、別苅(ベシトカリ)迄

5 国後島

ノテト崎よりブーニ、トウツツ、ト一沼、ケラムイ崎、ノテト崎迄

なお林藏の蝦夷地の内陸部の測量は、太平洋側の長万部より黒松内を経て日本海側の歌乘迄と、太平洋側の勇払より美々川、千歳川、トノム川、シコツ、オサツ、カリンハ川、夕張川、島松川、石狩川を経

て、日本海側の石狩川の河口迄(横切測量)とである。林藏は、これらの測量資料を江戸の伊能忠敬宅へ持参した。

文化十二年十月、江戸府内の測量の終った忠敬は、文化十一年六月に移転した亀島の地図御用所で、天文方の下役や内弟子たちと一緒に、十七年間にわたって行つた測量資料と間宮林藏から提供を受けた蝦夷地の資料とを基にして「大日本沿海奥地全図」の作製に励んだ。

しかし、実測全図の完成を見ずに文政元年(一八一八)五月一七日七十四歳の生涯を閉じた。

忠敬の死によつて地図作製の指揮は、高橋景保に引き継がれ、文政四年七月に、縮尺三万六千分の一の大図二一四葉、縮尺二一万六千分の一の中図八葉、縮尺四三万二千分の一の小図三葉の三種類の地図がやつと完成した。

八、師弟の絆で結ばれていた忠敬と林藏

蝦夷地測量の往路と復路の二回の面識が縁で忠敬と林藏とが、固い絆で結ばれた要因は何であったのか。それは、忠敬の全国測量と林藏の北方の地の探検が、共に未知のものへの探求であったことと、自分の仕事に対する誇りを共に持つていたことが二人の結びつきを強固にしたのではないか。

一方忠敬は、自分が一番将来を期待していた孫の将来のことや、江戸深川の隠居宅の売却のことなどを林藏に相談し、助言を受けている。林藏は、忠敬宅で扶持米や鶏卵を持参し、天体観測や沿岸測量の術を学んだ。又、測量に必要な羅盤や象限儀等の機器を忠敬を通して購入している。

なお、忠敬の唯一の論文である「仏國曆象編斥妄」の中には、林藏

のことを次のように記している。

資料一四 「仏國曆象編斥妄」 伊能忠敬記念館所蔵

○「仏國曆象編斥妄」 卷之五 曆法第四之三 凡二十七条

・西法の地度、その実に合わずことを論ず。

(略)

○忠敬見解

この初めの論、卷二の西洋の定む所、経緯甚だ非の篇で弁ず。又、近者、吾邦の里法を以て地度を測る者有る。曰く、北極出地を驗し、二十八里四百二十歩にして、一度差う。故に地球周一万百五十二里とは、即ち吾に測驗する所也。

余、命を蒙り測量をなす也。十余年、昼里程、方位を量り、夜は北極高度を測る。隅州屋久島より蝦夷に距る南北十五度、奥州より肥前の五島に距る東西も、また十五六度也。測量終りて沿海地図を製す。経緯度悉く符合す。

又、吾門生、間宮林藏、北蝦夷を測り満州を距る。北極出地五十度余也。即ち支那乾隆の十六省国図と合す。

測驗に拠らず、何ぞ万邦広狭の論なすか。

・金辺山、及び闇浮樹を得て、窺うべきことを論ず。

(略)

○忠敬見解

今世、幸いに望遠鏡有り、齊持して蝦夷の北に至り、高山よりその北を窺えば、必ずまさに金辺の光明、及び闇浮樹の相を観得るべし。蝦夷の極北は宋也。北極高四十五度也。北蝦夷（方言唐人）は四十六七度也。

資料一五 「忠敬先生日記」 五〇

・文化十一年九月二五日 晴。蝦夷会所間宮林藏へ書状を出す。

・文化十二年三月一七日 曇。間宮林藏方へ申越の薬種書添、田中金六方へ尾形手紙にて蝦夷会所へ頬遣す。代金三歩と錢六十八文同人より差越候旨申遣す。

資料一六 「伊能忠敬書状」 一四 文化九年一月一日

・三治郎、鉄之助壯健と大慶致し候。三治郎銀仕立の大小刀を被悦候哉、帶解迄は損し不申候様に御申付可被成候。我等国々を年来

余門生、間宮氏、北蝦夷を歴て満州に至る。北極高五十度余也。然れどもその説なし。紅毛、魯西亞五十五度より六十度に距る。金辺の光明、闇浮樹の説有るになびく也。杜撰孟浪論に足らず矣。

ここに記述してあるように忠敬は、林藏のことを「わが門生」といい、「林藏の測定した北蝦夷（樺太）と満州の北極出地度が五十度余といふ数値は、支那乾隆の十六省国図と一致している。実測もしていいで地度の広狭を論ずるは如何」と、間宮林藏の北方の地での実測値を高く評価している。

又、仏家の天文学説である「宇宙の中心は須弥山（妙高山）で、宇宙は、九山、八海、四大州からなつていて」という説に対して、忠敬は、林藏の北方の地での実測値を基にして、これらの説は「杜撰孟浪論である」と述べている。

林藏は、晩年、隠密御用を命じられ海防等に尽力したが、天保十五年（一八四四）二月二六日、江戸本所外手町で六十五歳の生涯を閉じた。

帶し候ゆへ、大に吉左右に御座候。扱、三治郎芸事仕立の儀、御心配可給候。第一手習、第二読みものを為致申度候。間宮林藏も我等と同意の所に候。兎角そもとの保養を專一に被成候様、春色には二、三日間にも、十町、十五町宛は出歩行申候様に可被成候。猶、追々可申入候。目出度かしこ。

正月二日 摂津国武庫郡郡山より。明石城下より正月五日出

妙薰御房

おりてどの まいる

東河父

資料一七 高橋景保より伊能忠敬宛の書状 伊能忠敬記念館蔵

文化八年十二月二二日付

嚴寒に候得共、其後愈御安全御精勤候哉承度候。当地拙家何も別異

無之候間、乍憚御休意可被下候。

然者、深川御留守宅之儀、御売払之儀、秀藏子、並に間宮林藏江御託し候由にて先日より某江掛合有之候に付、三郎右衛門殿茂承知に候はば、如何様とも取計可然旨、答候處、未だ御同人江は御相談茂無之由・・・・（以下略す）

伊能忠敬と間宮林藏との辯について、「伊能忠敬書状」「伊能忠敬測量日記」「蝦夷地下絵図」「仏国曆象編斥妄」などを依拠史料として記してみた。

身分制度の厳しい封建社会で、商家の主として、或いは、農民の子として生きた忠敬と林藏。二人には共通の人生觀があつたように思われる。人生の前半生で商才をはたらかせて財産を蓄積し、その金を使つて後半（天文曆学の履修・全国測量と日本地図の作製）の人生を意義あるものにした忠敬。一方、蝦夷地勤務の手当を日本の北辺の奥地

踏査の費用とし、間宮海峡の発見や、蝦夷・樺太・東韃靼の探検と地図の作製に励んだ林藏。

二人は、自分のおかれた環境の中で、目的達成のために、僅かなツテを頼りに幕府要人との繋ぎを得、共に大事業を完遂させたのである。

両者には、華艶さはないが、科学を追究する旺盛な精神力（熱意・根気）と、合理的（経済観念・氣骨）な生活力があった。その源泉は、忠敬は、佐原時代に培つた商人氣質（賢い・手堅い）であり、林藏は、北方の地の探検や幕府の隠密としての任務の遂行によつて培つた探検家魂（根気・手堅さ・決断）であろう。

完

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）



間宮林藏の墓 茨城県伊奈町 専称寺

伊能忠敬がメモしたアイヌ語

佐久間 達夫

伊能忠敬は、蝦夷地測量の際にアイヌの人々の協力を得るためにアイヌ語をメモしておいたようである。

「忠敬先生日記」一の巻末に、次のような言葉が記述されている。

○ 人

・ 男 || ビンニ

嬰兒 || ボンチヨ 小兒 || ヘカツ

五十歳前後 || シクブクロ

・ 女 || マツニ

嬰兒 || ホンチヨ 十歳前後 || マツニヘカツ 二十歳前後 || ラツカイ

老人 || チヤチャヤ

五十歳前後 || シクブクロ

ノコボウ 五十歳前後 || ルブ子マワ 老女 || パツコ

・ 髭 || レツキ 手 || テテ 足 || ケマ 指 || アシケベ

・ 善 || ピリカ 惡 || ウエン

○ 数詞

一 || シ子ツブ 二 || トツフ 三 || レツフ 四 || イ子ツブ

五 || アシキ 六 || イロン 七 || アルワン 八 || トベシ

九 || シ子ベシ 十 || ワ子

○ 食料品

酒 || イリルシユ 清酒 || カモイツケンベ 濁酒 || トノト

茶 || テロタイ 汁 || ラハヲ

○ 日用品など 欲食 || アマイベルシ

水 || ワツカ 油 || シュム 薪 || アベニ 炭 || パシナ

炭火 || ウスツ 灯心 || ラツチャリカ (シユ子ワカ)

行灯 || ラツチャリ 火 || アベ 灰 || ウナ 砂 || ラタ

付木 || イワウシタチ 梶 || イタンキ 膳 || イタ

茶碗 || シュマイタンキ 舟 || ツボン (チボ) 湯 || ウセ
熱湯 || セリツクヤ 温湯 || セウニン (トアルヤ)

山川など

山 || ノボレ 川 || ベツ (大 || ボロ 小 || ボン)

沼 || トウ 海 || アトイ 岬 || シレト子 浪 || コイ

○ 会話など

足洗う 依つて 湯持ち来たれ

|| ケマフライ クシユウセコ コロアリキ

先へ行け || ホンキノヲマン

待つて || ホシケ

跡から来い || ヨスノアリキ

立つて行け || アフカシテヤアラマン

近い || ハンゲ 遠い || トイマ

至つて上手 || シノアシカイ

捨てる || ウキリ

投げる || ラツワエ

浜辺へ 行つて よいか

|| ピシベカノ ヲマンツキ ピリカヤ

山辺へ 行つて よいか

今日 浜辺へ 行くなら 潮 よいか

|| キンベカノ ヲマンツキ ピリカヤ

潮 よい

|| タンド ヒシベカ ヲマンツキ シラリ ピリカヤ

潮 立ち 不能 || シラリ ヘベシユハ ウエヌハ

潮満 || シテリベツ 此所 何處 || タンコタン 子コナレヤ

これは || タンベ あの || 子ヤ

遙か 遠く 見える 岬 如何

|| ルイノ トイマノ ヌカル シレト 子コナレヤ

島原街道を行く—伊能忠敬追つかけ記

松尾 卓次

このところあちこちさらいて（島原地方の方言で歩き回ること）いる。島原の町歩きから始まって、島原藩主の参勤の道・島原街道をと歩いてみた。さらに殿様を追つかけて長崎街道（長崎・小倉間）も歩き終えだし、やがては江戸・東京までも歩いてみたいと思っている。

こうして歩き回つて書いたのが『島原街道を行く』である。

島原街道—それは島原半島をぐるり一周する約110キロの道である。この道は「往還」と呼ばれ、「殿様道」ともいわれた。つまり藩主の参勤や領内巡視の道であつて、島原地方のメインストリートであつた。実際にこの道を歩いて、見聞きしたことを書いたのが本書で、島原地方の歴史物語である。

島原街道は、島原城大手御門前を出発して島原城下町を北上し、三会、多比良、山田などの村を通つて愛津村原口番所までの北目道。南に下つて、深江、有馬、口之津、小浜などの村を通つて、愛津村原口番所までの南目・西目道。この両道で領内一城下町・三十三村が結ばれていた。今日でもこの道はほぼ残り、たとえば島原半島を一周できる。

この道を藩主が往来しただけでなく、多くの旅人が利用した。坂本龍馬は長崎への道を急いだし、吉田松陰は原城跡に立つて歴史を思考している。伊能忠敬は領内を測量して一周した。十一月の寒中であつ

たのか、歯痛に苦しんでいたと島原出しの手紙に書いている。

このように島原街道は歴史の道である。

私も旅人になつてこの道をたどつた。そしてそれぞれの土地の歴史と風土を訪ね、いろんな出会いがあつた。まだあちこちに豊かな自然と人情が残つている。のんびりと歩いていると、身も心も洗われる思いがする。

島原街道は温かい道である。

ということで、拙著『島原街道を行く』の紹介を終わろう。

この街道歩きでいつも出会うのが伊能忠敬さん！（仮想世界でのこと）その追づかけ記を書く。

伊能忠敬一行が来島したのが、文化九年（1812）の冬である。十一月四日に入国し、その日は愛津村庄屋深浦九郎左衛門宅に止宿。深浦家は今も続いているから、建物こそ変わつたが、その庭はそのまま残つている。雲仙岳を借景としたその風景を伊能忠敬と同じように目にすることができる。

翌日から領内の測量が始まつた。「烈風の中を先手は六つ頃出た」と日記にあるが、相当寒風が厳しかつたろう。同じ頃島原入りしていた野田泉水院は石炭で暖を取つたと旅日記に書いている。

「（十一月十九日）晴天、大西風。今日も（島原への）渡海なし。：折節寒中少々雪あり、：薪木は、：石炭を焚きあたらせる。硫黄の臭きこと頭痛に及ぶ」（日本九峰修行日記）

島原止宿は別当・中村孫右衛門宅。島原城下町のど真ん中にある。屋敷は大型店舗に変わつたが、屋敷門は移されて今も残る。四日間この門を出入りしたのかと、その思いにふけることが出来る場である。



島原城下町別当 中村孫右衛門屋敷門

伊能忠敬測量時の本陣

た。流れ山によつて多くの島々が生まれたが、その島を一つ一つ測つて回つてゐる。その数三十九。

しかしそのころは復旧していく、「湊は新たに人家が出来たものである」と日記ある。町の南部には島原湊もできて、昔の賑わいを取り戻していた。一方、眉山の崩落跡を通つた時、「寛政四年大変後の荒地の界筋である。道より左は小松が生焼けで石原、右は障りなく平らな畑が一面である」との記述もある。

できあがつた伊能図では、三筋の流れ跡が描かれている。二百年後に起つた平成の雲仙岳噴火災害でも、これと同じところを土石流が走り、大きな被害をもたらした。伊能測量の成果が、残念なことに忘れられていたのである。

現在でも市中測量の跡をそのままたどることが出来る。2000年の「伊能ウオーキング」島原通過の時には、「島原ちび子伊能測量隊」を組織して、その地を歩かせ、梵天を立てて一部を測量させた。

島原のつぎは布津村止宿。そこで名松を見ている。

「高さ四尺余、横九間、長さ十一間と枝葉が八方に延び、階級百一十五六に分かれる。年度六十七八年に及ぶ」と述べる。残念ながらこの松は伝わつてないが、全国を見ている伊能が賞賛するほど

の松であつて、百坪に枝葉を広がらせていた。

南有馬村では原城跡に立つてゐる。測量時に土地の老人治右衛門（八三歳）から詳しい説明を受けた。島原の乱時に三万もの農民が虐殺されたところであるから、熱心に語つたのだろう。「その他委細演説す。事繁しければこれを略す」と、少々へきへきしたのかな。

雲仙へも登り、地獄（噴火口）や温泉場を訪れてゐる。「湯名に地獄名をつける」とあり、今もその名は残つてゐる。

ここから妙薫へ出した手紙には、「年が明ければ六十七歳になり、元気に候得共、歯は一切になり時々痛み、奈良漬けも食べ兼ね、豆腐とカブラ、ひし干などがよい…」とあり、弱音が出でている。

一行は島原市中をくまなく測量している。島原測量は、島原大変の二十年後のことであつた。島原大変といふものは、背後にある眉山が大崩壊して城下町を埋め尽くし、大津波が沿岸を洗つて一万五千人も犠牲者を出した日本災害史上でも一、二にあげられる大惨事であつ

出島文庫

☎ 095-1825-12960

長崎市金屋町



こうして十六日に及ぶ島原領内の測量が終わって、隣領佐賀藩諫早へと去る。その後、大村領、平戸領、対馬・五島へと進み、長崎市中などを測量して引き揚げた。

島原領内では庄屋宅を本陣としていた。この庄屋元は現在も続いているところが多く、今でもその地に立つことが出来る。また島原測量時の「下絵」が残されているので、その詳しい測量の跡がわかり、地方史研究に大きく役立っている。

その後、昨年、一昨年と豊後街道（熊本・大分鶴崎間）を歩いたが、これまた伊能忠敬の足跡をたどる旅となつた。それはまた後日紹介することもある。

（まつおたくじ・島原城資料館）

九州文化図録撰書／第四卷 伊能九州図と平戸街道

松本健一氏がヨミウリウイークリーで絶賛。平戸藩に伊能図がなぜ存在するのか。本書では、その理由とともに伊能忠敬と松浦静山の交流を絵図とともに解説している。

松浦史料博物館所蔵の伊能図は、小図の「九州図」を原寸で地域別に十二分割して掲載。九州中の街道のルートや地名、朱の測線が明解。中図の「西国海路図」は半分弱の大きさで八分割して標津・淡路から瀬戸内海を経て、筑前・肥前長崎に至る海路を掲載。ほかに大図の「平戸図」「長崎図」など貴重な絵図を掲載。

編者／遠藤薰・新入会員です。

税込み定価2520円

図書出版のぶ工房 ☎ 092-1531-16353
この書籍は地図センターの取扱品です。



忠敬談話室だより

□佐原訪問記、大野弥三郎 荻原 哲夫

去る三月一八日は孫・伊能忠誨さんの命日（文政一〇年二月二一日・一八二七年三月一八日 178 年忌）でしたので、佐原市牧野の観福寺の墓所に「御礼」参りをしてきました。

「御礼」の意味は、佐久間達夫さんの「伊能忠誨日記」連載に出会うことができて、かつ、昨年一二月の日本大学文理学部における伊能図展のお手伝いが出来、そのお蔭で私のような天文学史研究者にとって超目玉となつた「星図三軸」の展示に全期間立ち合わせて、いたゞくことが出来た、その幸福感からといふのが主たる理由でした。でも…。

ほんとうの理由は、展示会が終了した、その後に立て続けにわが身にもたらされた不思議な因縁に関してです…。別途報告ですね。

実は観福寺は二十数年ぶりで忠敬先生の墓は記憶していましたが、忠誨さんの墓と戒名を掲載した第39号を忘れて来ていきました。佐久間さんが散歩に見えられ、忠誨さんのお墓などを教えていただきました。これはもう忠敬先生のお導きと思われるを得ませんでした。

本郷さんには六月の佐原旅行での再会を約束して別れて、記念館へ向かいました。ちゃんと入場料を出して入館して、学芸員の紹野浩幸さんが居られたので、忠誨さんのことについて一時間ばかり話し込んでお仕事の邪魔をしてしまいました。

記念館に来られた団体入館者に付いた佐原市のボランティア解説員の説明をしばらく聞いて、「忠敬研究会の会員です。解説しますか?」などと出しやばるようなことはせず、展示をざつとみてから外へ出ました。

そこから佐久間達夫さんに電話を掛けたら、初対面にもかかわらず会つていただけるとのことでした。厚かましくもお宅へお邪魔し、忠誨日記の不明箇所について質問し、マイクロ写真を見せて戴くなど大変お世話になりました。佐久間さんは持つてある資料を次から次へと出して見せてくれましたので、ついつい夕方近くまで居座つてしましました。ほんとうに楽しく充実した佐原訪問となり、佐久間さんに見送られて帰宅の途についたのでした。

会報40号から「二人の弥三郎」

大野弥三郎は二人いて、弥三郎規行が忠敬

さんの測器（象限儀など）を作り、江戸に帰つた後は、傷んだ象限儀のメンテナンスをし

ていることは、佐久間さんが以前に紹介された「江戸在住日記」に度々出でています。もう一人の弥三郎規周は規行の息子です。この大野弥三郎規周の写真が、『幕末写真の時代』小沢健志編著（ちくま学芸文庫）に出でています。そこに1820～1886と生没年がありますから、忠敬先生の亡くなつた文政元年（1818）には規周は未だ生まれていません。またこの本には榎本釜次郎（武揚）の写真もあります。つまり、忠敬さんと関係の深い大野弥三郎規行と箱田良助の子供たちが仲良く幕府のオランダ留学生となつてオランダで写真に記録されていたという訳です。この弥三郎規周は洋装していますがいかにも時計職人さんという感じです。忠敬先生のところに入りしていた弥三郎（規行）もこの弥三郎規周に半纏を羽織らせた感じであつたかと想像しながら測量日記を読んでいます。

（おぎわらてつお・東亜天文学会歴史課長）

□川柳を楽しむ！ 古川市の武川影法師さんは全国郵政川柳人連盟の東北・北海道ブロックの選者を務めておられます。

「江戸川柳を勉強しています。大変隠語が多くてむずかしいですが、忠敬さんの生きていった時代の古川柳を書いてみたいと思つていま

す。たまにはや・わ・ら・か・い・話・し・も・面・白・い・か・も・



□伊能忠敬に迫る現代の歩測名人

NTV「おもいつきりテレビ」に会報が登場！

□広がる大図展！鹿児島から全国へ！

この日に合せた話題は「第一回全日本歩測大会を開催した日」というものでした。五年前武藏野市で開かれたスリーデーマーチで第一回全日本大会が開催され、大勢の会員のお手伝いを頂きました。その経過は会報で報告されています。正解の説明に会報が紹介されました。十分間の番組ですが各方面に取材するのですね。対馬の知人からさつそく「見ましたよ」と連絡がありました。事前に知らせていなかつたのに電波の威力に感心しました。



南アルプス芦安山岳館では来年一月末まで「伊能図と南アルプスの測量・地図展－山頂への足跡一〇〇年の時空を超えて－」が開催されています。

各地からの開催の要望が多く、日本地図センターでは引き続き各地の開催を支援していく予定です。

天図展

注・予定情報ですので要確認です。

月	11	9	8	7	16	8	5
	2	2	2	11	8	5	5
	4	28	14	5			

高知市
高松市「市民会館」
徳島市「徳島そごう」
岡山県新見市
北海道留萌市

五月一日から鹿児島市で大図が公開されました。六月上旬は東京の新宿駅で「伊能図から現代」展。その後佐原市へと続きました。

11・18～20

静岡市「地図展05 in 静岡」

http://

www2.clis.ne.jp/syogai/nrtbutto

11月 下旬 鳥取市「歴史博物館」
2006年 今治市、旭川市

伊能忠敬大阪測量二百年記念イベント！

主催 私たちのみちとまち in 堺実行委員会

「ウォーキング＆シンポジウム」

8月27日（土）堺市浜寺公園

教育テレビで「伊能忠敬」再放送！

NHK学校放送「測量実験の様子」

9・14水 午前11・15～11・30

9・21水 午前11・15～11・30

11・1火 午前3・05～3・20

・学校デジタルライブラリー

「なんげん日本史」

11・8火 午前2・00～2・50

□「韓国一周友情ウォーキング」

5月31日一行は無事、元気で釜山に到着しました。ウォーキングの模様は都度ネット報道されましたが、まとめは朝日・埼玉版で金井さんから報告された。隊長の西川阿羅漢さんは旅の途上で「瑞宝双光章」の受賞の報に。

□忠敬史料のネット検索広がる！

開館以来一〇四年の歴史、成田山仏教博物館の蔵書検索システムが完成。館報から

国会図書館も蔵書しない書籍が多数あります。最後の綱として活用を呼びかけています。ちなみに伊能文献の検索では88件あります。戦前の貴重書がかなり入っています。

小原大衛氏旧蔵の測量日記や沿海日記も。



国立国会図書館はインターネット上で画像を公開する「貴重書画像データベース」を拡充し、古地図や城の外観図など「絵図」の公開を始めた。

公開したのは伊能忠敬の「伊能日本実測小図や江戸初期の日本地図、十七世紀中ごろの大坂城の外観図など五十三点がある。

<http://www.ndl.go.jp>

続く佐原の生誕記念行事へ

六月の「あやめ祭り」から七月は「佐原の大祭・夏祭り」「水郷さわら花火大会」。秋にはNHK FM番組「ベストオブクラシック」「佐原の大祭・秋祭り」「市民文化祭」など催事が続く。「観光写真」、「町並み建物公開事業」「ふるさとハヌスタ佐原」「中心市街地活性化ウォーキング」などの大型記念行事が計画されています。

是非、佐原へのお越しをお待ちしています。

お知らせ

□新入会員のみなさんです。どうぞよろしく

遠藤 薫さん 福岡市中央区

九州歴史の道研究

「図書出版のぶ工房」編集者

木内 志郎さん 東京都大田区

千葉商船㈱代表取締役

額賀 大康さん 東京都渋谷区

明治神宮総務課長

鶴 博敏さん 埼玉県鴻巣市

中小企業総合事業団〇B

宮内 敏さん 銚子市

元高校教師、コンピューター学校講師

山口 惣司さん 千葉県東庄町

詩人

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

②例会・見学会の開催
第42号締切 9月末 発行 11月

③忠敬関連イベントの主催または共催
第43号締切 12月末 発行 2月

④その他付帯する事業
第44号締切 3月末 発行 5月

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバツクナンバーをすべてお送りします。

⑤(04年8月に事務所は新宿区下宮比町から移転いたしました)
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

Tel・Fax 03-3466-9752

事務局メール fuku-inh@ej9.so-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七一八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2~8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。

また、各種情報、近況、話題などお便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページでは大友さんに永年お世話をなりました。秋葉武晃さん
に引き継がれています。どうぞよろしく。

一予定一

<http://inoh-tadataka.org/>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jc.com/home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

編集後記

佐原でペイレ図公開とシンポジウムから10年。この節目に待望の大図214枚が里帰り、生誕祭は盛大に。次世代の元気な顔々にはたぶん忠敬さんも笑顔で答えたことでしょう。本号は皆様の暖かいご支援により増貢になりました。先日日本三景松島を歩きました。忠敬さんは34才の時妻達と観光旅行、「奥州紀行」を記しています。塩釜に向う途中、末の松山では「俊成卿女、定家卿、西行法師の和歌」「塩竈明神へ参詣し普請の結構、神社正面に両社有り、右宮左宮と云い、里人は鹿鳴香取の神なるよしと」「八百八嶋の景一眼に相分り、其景色筆墨の及ぶ所にあらず」、瑞岩寺「座敷の結構、金襴、彫もの二仲かたし」。時代を超えた記録をなぞり、文化系態度を携えて実業の世界から自然界への探究心を育てていたようです。鹿児島大図展、武藏野マーチ、佐原行安心。次号で報告が聞けます。ハーバード大学図書館の会報注文は継続。ちばらぎに広がる偉業、枝葉伸びぬに育て忠敬子」(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.41 2005



Commemoration Number Congratulations

on 260th Anniversary of Tadataka Inoh's Birth

1. Sawara Survey Maps has Restored	Editorial Department	1
2. From Varios Events in Sawara		2
3. The First Half of Tadataka's Life:Sawara		3
Town Map and Picture of Sawara	Sakuma Tatsuo	6
4. Sawara,Tadataka's Home Town	Sakuma Tatsuo	10
5. Deep Impression Afresh about Sawara	Shinzawa Yoshihiro	14
Compuce a Poem about Tadataka(3)	Yamamoto Kimiyuki	18
	Inoh Hiroshi	27
TOPICS		
In Conclusion of Exhibitions of Large-scale Inoh Maps in Musashi	Ohtsubo Shuji	20
Documents about the Maekawa's Attendance to Tadataka	Watanabe Kenzo	22
Japanese Poems -Tanka and Haiku--about Tadataka	Watanabe Kenzo	26
Tadataka's Survey Travel on Foot	Kakimi Soichi	28
Report of Travel Tracing Tadataka's Survey Route on a Sunday	Yamaura Sachiyō	29
Road--Transcend Space and Time	Niigata Nippō	30
From Daily Yomiuri Brief Review	Daily Yomiuri	45
Histry about the Name and Seal of Buyodo Company	Kojima Hisatake	58
Walking Travel on The Shimabara Highway	Matsuo Takuji	67
MATERIALS		
Reading Documents "Seimonkinkyoruiroku" (8)	Kojima Ichijin	32
Inoh's Family Documents(5)Ogata Kenjoro's Letters	Ando Yukiko	38
Mamiya Rinzo's Survey in East Ezo	Iguchi Toshio	46
Tadataka's Unannounced Letter(3) Hakoda Sonoemon's Letter	Itoh Eiko	54
Tadataka Inoh and Rinzo Mamiya (2)	Sakuma Tatsuo	59
Ainu, Tadataka Noted Down	Sakuma Tatsuo	66
MEETING ROOM		
Report from Sawara and Ohno Yasaburou	Ogiwara Tetsuo	70
Information	Editorial Department	72

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY